
ゼロの使い魔～竜の血族～

駄作者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔〜竜の血族〜

【Nコード】

N2997V

【作者名】

駄作者

【あらすじ】

初めての彼女と初デートの日に義妹に殺された。イケメン神に特典を付けて別の世界に連れて行くと言われたので役に立たない特典を貰った・・・細々と暮らしたかったからな。そして転生した先は・・・何となくエルフ以外のハーフでオリ主を作りたいなと思って書き始めました。自己中満点で事故解釈多めです。こんな作品ですが宜しくお願いします。嫌な方は戻るをオススメします

キャラ設定（前書き）

ネタバレ注意です

キャラ設定

【名前】

アルトリア・ペンドラゴン・ド・ガリア

【愛称】

アーサー

【性別】

男の娘

【人種】

人間と韻竜のハーフ

【年齢】

原作開始時・18歳

【外見】

Fateのセイバー

髪は青みがかった銀色

【身長】

170センチ

【属性魔法】

メイン風

サブ土・水・火

【クラス】

風・スクウエア
土・トライアングル
水・トライアングル
火・トライアングル

【魔法媒体】

メイン指輪

サブ髪留め

【能力】

母親が韻竜なので竜人化が可能
精霊魔法も使える

【備考】

父親がガリア王、母親が韻竜の子供
外見は人であるが、興奮したり、感情が乱れると瞳孔が竜のように
長細くなる

イケメン神の余計なお世話で身体能力、魔法素質がずば抜けて高い
素質が高いだけなので、何もしてないと上がらない

イケメン神の特典三つを断ったので

1マジックアイテムを造る能力

2身体能力、魔法素質

3????? (不明)

が与えられた

【名前】

クレア・ド・ガリア

【性別】

メス

【人種】

韻竜

【年齢】

6000歳以上

【外見】

Fateの遠坂凜

髪は銀髪

【身長】

159センチ

【備考】

6000年前ヴィンダールブに仕えていた韻竜

ガンダールブを乗せて適地へと何回も運んだことがある

今は精霊魔法で人間の姿になり、ガリア王との間にアーサーを産んだ韻竜

キャラ設定（後書き）

増えたら書き足します

第1滴

今日初めての彼女と初デートをした

二十歳になって初めての彼女だ！

夕飯は彼女と一緒に食べたので、風呂に入ってベットにダイブする

俺の家族は父、義母、義妹と俺の4人家族だ

俺が二歳の時に母が死に、父が1人で8年間育ててくれた

十歳の時に今の義母を紹介されて、いきなり結婚したいと言われた

時は驚いたが、承諾？した

義母の連れ子は三つ下で、人見知りの激しい子だった

懐かしいな・・・よく義母の後ろに隠れてる子だった

「ふあむ・・・つと、今日はかなり疲れてるな」

仰向けで大の字になって目を瞑る

初めてだったから、いろいろ緊張したな

手を繋いだ時は、心臓が張り裂けそうなほどドキドキした

今も胸が痛いくらいだ

初めてのキスは・・・そう、鉄の味だ

・・・え？

「・・・ごぶつ・・・何が・・・？」

胸が熱い、何か液体が口まで這い上がってきた

目を開けると・・・

「・・・お兄ちゃん」

義妹が俺の上で馬乗りになり、包丁で胸を刺していた

「な・・・なん・・・で・・・?」

痛みは無い

混乱してるからかな?

だんだん力が抜けていく

瞼が重くなってきた

「お兄ちゃんが悪いんだよ?」

グサグサと何回も包丁を突き立てる義妹

・・・よく意識があるな

普通なら即死だろ

「私が居るのに、他の女に手を出すなんて・・・」

義妹は大きく振りかぶる

最後の一突きだろう

視界の隅では、両親が慌てて入ってくるのが見えた

・・・もう間に合わないだろう

包丁は勢い良く顔面に向かってきた

私が誰よりも愛してるのに

それが俺が最後に聞いた言葉だった

「うーん・・・ヤンデレだね」

・・・あれ？

今殺されたんじゃない？

いつの間にか、白い部屋に居た

ソファアが二つあり、間にテーブルがあるだけの白い部屋

そのソファアの1つに俺が座ってた

「うん。君は死んだんだよ」

反対側のソファアに座っている金髪イケメンが答えてくれた・・・
つてか、心を読まれた？

「僕は神様だからね」

「・・・そうか」

ソファアに身を預けるように座り直す

「あれ？驚かないんだ」

「普通に義妹に刺されて死んだんだから・・・死後にどうなるか
気になったから、考えた事もあるんだよ」

いろいろ考えたな

天国、または地獄に行く

そのまま消滅する

記憶が無くなり生まれ変わる

断片的な記憶があるまま生まれ変わる

などなどだ

極稀に記憶があるまま生まれ変わるって聞いたこともあるな

「いろいろ歪んでるね」

ニコニコ笑いながら言うイケメン神

「へいへい・・・んで、俺はどうなるの？」

まさか義妹に刺されて死ぬとは思わなかった

・・・あんなに懐いてたのにな

「君には別の世界に行ってもらおう。3つの特典も付けるよ」

「別の世界？何で行かなきゃいけないんだ？」

・・・面倒くさい

なんで別の世界にまで行かなきゃならんだ？
そして何故俺なんだ？

「面倒くさいって・・・普通の人なら喜ぶよ？3つも特典をあげるんだよ？」

少し焦りだすイケメン神

そんなに行ってほしいのか？

「俺にこだわる理由は？」

「たまたま君が死ぬ瞬間を見たからだよ。義妹がヤンデレ化して刺されるって・・・インパクトが強かったからね」

しかも彼女との初デートの日だからな

「そのわりに憎しみとか無いんだね？」

「恨んでもしょうがないからな」

「器がデカいとかの話じゃないね・・・っと、話がズレ過ぎた。頼むよ、別の世界に行ってくれよ」

・・・神が懇願

なんか優越感があるな

「別の世界って？」

「おっ！行ってくれるのかい！？」

顔が近い！

身を乗り出すな！

「話を聞いただけだよ」

「前向きに考えてね？・・・世界はゼロの使い魔の世界だよ」

・・・ゼロの使い魔？

「あのライトノベルのゼロの使い魔？」

「そうそう」

「断る！」

「なんでやー！」

当たり前だ！

死亡フラグ満載で、国崩壊フラグも満載！
国のトップが駄目なのが半分！トリステインとアルビオン！
さらに大陸崩壊とか、ありえないだろ！！

「他はないのか？」

「ごっめ〜ん。無いんだ」

かるっ！

しかも両手を顔の前に合わせて、ペコちゃんスマイル・・・うん、
ウザイ！！

コイツの相手は疲れるな

早く決めちまおう！

「・・・はあ、もう3つ決まった」

「おおっ！行ってくれるか！！」

目立たないように、戦には参加しないようにする！

これは絶対条件だ！・・・イケメン神にバレないようにな（笑）

「そうそう、絶対にメイジになってもらうよ」

メイジになるのは絶対なのか

なら、平民メイジになれば大丈夫か？

「1・貴族にならないようにしてくれ。2・ゼロの使い魔の未来の
知識を消してほしい。3・性別は男性にしてくれ」

「なっ！」

イケメン神が驚いた・・・誰が好き好んで戦争に参加するか！
これで静かに暮らせるだろう

1があれば、貴族でなければ、戦争に強制されることは無いだろ！
2は正直知識があつても介入する気無いしな、人物と一般常識？があれば十分だろ

3は・・・無理矢理だな
女になるのは嫌だっただけだし

「ちゃんと3つ選んだぞ？もう十分だろ？」

ニヤニヤ笑いながら言っただけ

普通の村人に産まれて、結婚して、子供が産まれて死ぬ・・・うん、満足だ！

「クツ・・・わかった」

イケメン神が書類を取り出して何かを書き始めた
日本語・英語じゃないからわからない
しかもブツブツ何かを言ってる・・・何かをしようとしてる？

「余計なことするなよ？」

「・・・え？」

おい！！

何で動揺してんだよ！

何をしてるんだ！？

「何を企んでる!？」

「な、何も企んでないさ(焦)それより名前どうする?」

「(焦)ってなんだよ!名前なんてなんでもいいよ!何をした!？」

「もう時間だね!じゃあ行つてらっしやい!！」

イケメン神は焦るように書類に殴り書きをしてハンコウを押しした

「書類を寄越せ!」

俺が勢い良く立ち上がった時に・・・地面に穴が開いた

「またね〜」

笑顔で手を振るイケメン神・・・イラつくな!

必死に穴の縁をに手を掛けようとしたら・・・さらに大きくなった!
もう無理・・・落ちていく

「おお!起きるか!」

意識の浮上と共に聞こえてきた声

うつすらと目を開けたら、青髪の男性が見えた……てか、老人だ
歳は60歳くらいか？……こんな奴が父親？

「そんな大きな声を出しては泣いてしまいますよ」

今度は優しくそうな声だ

髪が銀髪の女性

「すまないな……体は大丈夫か？」

男性が女性の身体の具合を聞く

「ええ、大丈夫ですよ『人間』とは初めてでしたから……見て？
あなたの青と私の銀が合わさった色よ」

俺のうつすらとある髪を、女性が老人に見せる……人間は初めて？
ゼロの使い魔、青髪……確か青髪の代表的な一族ってガリア王家
だったな

まさかガリア王家！？

ガリアの誰の子に産まれたんだ？

クソッ！

記憶を消したから誰が危ない人なのか解らん！

「アーサーもお父さんが来て嬉しいのかしら？」

俺の顔を覗き込んでくる女性……母親

俺の名前ってアーサーなんだ……いや愛称か？

「そっか？どれ？」

そう言っ て俺を抱き上げる老人
優しそくに微笑んでるけど・・・お前誰だよ！

「この子はどっちの兄に似るのかの？」

微妙な表情になる老人

「あら？ガリアの王様がなに弱気になつてゐるんですか？」

母親はクスクス笑いながら言う・・・ガリア王？兄達？
考えたくなかつたけど俺、ジョセフとシャルルのなんだ
貴族にならないはどうした！！
貴族でなくて王家なら良いと思つたのかよorz
ムチャな屁理屈だろ

「ほら、笑つて下さい。アナタには笑顔が似合います」

ガリア王の頬に手を当てて、諭すように言う母親

「そうだな・・・コレで良いか？クレア」

ニカツと笑つて言うガリア王
俺どうなるんだろ？

跡目争いとかに参加したくないぞ？

「まあ！」

母親・・・クレアも驚きながらも、嬉しそくに微笑む

「私はもう戻る。何かあつたら使用人に言いなさい。直ぐに駆け付

ける」

ガリア王がクレアの手を握りながら言う

・・・ああ俺って妾の子か

クレアって明らかに若いし・・・20代前半かな？

ガリア王が部屋から出て行った

「相変わらず忙しい人ね・・・アーサーはもう寝ましようね？」

そう言って右手を俺の顔の前に持ってくるクレア・・・何をしようとしてる？

指パッチンをしたらいきなり眠気が・・・魔法で強制的に寝かすのか！？

第2滴（前書き）

エルフ達は精霊魔法って呼んでましたっけ？

先住魔法って呼んでましたっけ？

誰か教えてくださいorz

第2滴

コツチの世界に来て3年が過ぎた

今日が3歳の誕生日だ

妾の子なのに待遇が良く、食事・衣服・家が豪華だった・・・この世界では普通なのか？

屋敷も自然が多い所で、首都からあまり離れてない・・・若干矛盾してる？

前世が一般家庭の日本人だったので良く解らない

比較対象も居ないので尚更だ

ガリア王・・・父さんは2週間に1回くらいのペースで来る

なので、俺の中では父さんよりもお祖父ちゃん、もしくは知り合いのおじさんだな

1回間違えて「じいじ」って呼んだら、メツチャ落ち込んだ・・・悪かったな父さん

クレア・・・母さんは良く物語を話してくれる

6000年前のブリミルの話だったり、今は絶滅した韻竜の話だったりだ

不思議な事に第三者として話すのではなく、当事者として話すのでその人物の心境が良く解った

それから、兄弟・・・ジョセフとシャルルには俺の事は秘密にしてるみたいだ

たまたま父さん達が話してるのを聞いただけだから、詳しくは知らない

そして最近の悩みは・・・

「アホ毛が・・・」

2歳の時にアホ毛が出来てしまったorz

昔はFateのセイバーを幼くしたらこんな感じかな？つて鏡を見てただけだったけど、まさか本当にアホ毛が出来るとは・・・アホ毛が出来た当初は直そうと一生懸命努力したけど駄目だった半年前から諦めた
今は昼過ぎだ

母さんに食堂に来るように言われてたので、扉を押して中に入る

「しつれーします・・・なあに？」

食堂には母さんと数名のメイド・執事がいた

因みにメイド3人、執事2人だ

「アーサー、コッチにいらっしやい」

母さんに呼ばれたのでトコトコ歩いて近付く

俺の誕生日会は夜で、父さんと母さんと使用人達だけでやるはずだからまだ早いと思うんだよね・・・場所も中庭だし

何のようだろう？

「突然の事だけど驚かないでね？」

母さんがそう言いながら俺を抱き抱えた

全然話の先が見えません

「実は私、韻竜なの」

・・・

俺耳がおかしくなったのかな？

韻竜？

絶滅したんじゃないの？

母さん全然竜に見えないんだけど？

「え？・・・あ？・・・ハアアア！？」

「いきなりこんな事言われても困るわよね？でも、ちゃんと聞いてほしいの。いい？」

真剣な表情で言う母さん

「あ・・・うん」

「それじゃ、話すわね・・・」

それから母さんはポツリ、ポツリと話しだした

母さんが6000年前ヴィンダールブに仕えていた事

ガンダールブを乗せて適地へと何回も運んだ事

6000年以上生きて、退屈し始めた時にガリア王に会った事

その時に一目惚れして妾になった事

ガリア王も母さんが韻竜だと知っている事等である

「・・・そーなんだ」

「ごめんなさいね。アーサーは普通の人間ではないのよ」

母さんの表情が曇る

俺のこの姿・・・Fateのセイバーの姿って、そうゆうフラグだったのか？

セイバーって竜の因子を持ってたはずだし

ムチャクチャじゃね？

そんな事よりも・・・

「アーサーも、ママとおんなじちからつかえるの?」

前向きに生きていこう!

俺が出来ることを全て知って戦争介入フラグをへし折るんだ!!

「あら?アーサーは今の話を理解できたのね?」

理解出来ないと思って話してたのか!?

まあ、普通は3歳に話しても理解出来ないわな

「そうね。精霊魔法は使えるでしょうね。韻竜の力は・・・どうかしらね?」

ニッコリ笑いながら言う母さん

精霊魔法使えるのか・・・練習出来たらいいな

「ママ、セーレーマホー教えて?」

「ええ、良いわよ。明日から教えてあげるわ」

「んっ」

コクンと頷く

そう言えばメイド・執事達の前でそんな話をして良かったのかな?

「はなしていいの?」

一度メイド・執事達の方を見て、母さんに聞く
それにしても舌が回らない!

「本当に頭が良いのね あの人達は私が韻竜って事知ってるから大丈夫よ。それに・・・」

母さんがメイド・執事達の方を見たので、釣られて見ると・・・ドロンと古典的な音を立てながら、メイド・執事達の姿が変わった変わったと言っても顔の一部だけだが

「みみ・・・ちがう？」

そう

耳が変わった

耳が長く尖っていたり、動物の耳だったりだ

耳の他にも額に小さな角があったり・・・変わってないのが居るな

「あの人達はエルフや獣人、吸血鬼や鬼人・・・人間達に嫌われてる人なのよ」

変わってないのは吸血鬼か

「私と同じように行き場が無い人達を、この屋敷で雇ったの。彼等が初期に雇った人達よ。それからドンドン増えて、訳ありの人間、偏見の無い人間も雇ったわ。この屋敷に居る人達は全員が私達の事を知ってるの」

へー

じゃあこの屋敷って結構危ないんじゃない？

確か唯一の宗教である・・・何だっけ？

えーっと・・・ロマ・・・ロマニア？

マニアじゃなかったな・・・ロマリアだ！

ロマリアにバレたら異端だって騒がれるだろうな・・・面倒くさい

事極まりないな

「屋敷の人達は全員知ってるけど、領地の人達は知らないわ。注意してね？」

「あいつ！」

メイド・執事達はまたフェイスチェンジで顔を変えたおっ！

今何か不思議な力を感じたぞ？

あれが精霊魔法なのか？

確か自分の魔力を使わないで、契約精霊にお願いするんだっけ？

「アーサーはハーフだから、人間の魔法も使えるはずね・・・5歳になったら杖と契約ね」

「あい」

平凡な暮らして言ってるけど、目の前で魔法を使われたらテンション上がるな！

早く大人になりたいものだな

「今日からアーサーにも、専用メイドを付けるわね？」

マジか！

ドンドンテンションが上がってく！

もうキャラが変わってるけど・・・しょうがないよね！！

「し、しつれいしますっ！」

金髪の女の子が入ってきた

年齢は5歳くらいかな？

「吸血鬼のエルザちゃんよ。まだ100歳で力も弱いのに」

・・・100歳で幼いんだ

まあ、母さんから見たら幼いよな

母さんは6000歳以上だもんな

「エルザちゃんにはアーサーの専用メイドになってもらうわね？」

「は、はい！よろしくお願いします！」

勢い良く頭を下げるエルザ

「あい」

俺もコテンと頭を下げる

「じゃあよろしくね」

今まで膝の上にいた俺を下ろす母さん

もう行っても良いって事かな？

トテトテと歩いて扉まで歩く

そしたらエルザが慌てて付いて来た

まさかずっと付いてくる気か？

まあ良いか！

エルザの事でも話してもらおう

夜パーティが始まるまでエルザの事を話してもらった
簡単に言つと、最近両親をメイジに殺されて、殺されそうになつて
逃げ出した時にガリア王に会つたみたいだ
エルザの家系？はなるべく血を吸わない用にしてたらしい
吸つても生き血ではなくて、一度体から取り出した血を飲んでたら
しい
人間に危害をくわえたくないんだと

「アルトリア様。お誕生日おめでとつございます」

「あい」

使用人達がお祝いの言葉をくれる
エルザは俺の一步後ろに付いて来ている

「旦那様がいらつしゃいました！」

門番？の声だ
父さんが来たみたいだな
迎えに行くか
中庭から屋敷に入つたら、直ぐに父さんを見つけた
少し駆け足で父さんに近付く

「・・・パパ？」

迎えに行つたら、父さんの表情が曇つてた

「アーサー、すまん」

いきなり謝られた!?

なんで？

「ちよくちよく居なくなるから付いて来たら・・・まさかな」

「隠し子だったとはね」

父さんの後ろから青髪の男性2人が顔を出した・・・青髪
ジョセフとシャルルだな

・・・俺って秘密だったんじゃないの？

第3滴

俺の3歳の誕生日会の時に、父さんは兄であるジョセフとシャルルで
あろう人物を連れてきた

「こっそり抜け出してたつもりだったんだがの」

頭をかきながら困ったように言う父さん

コレからどうなるんだ？

俺の存在がバレた以上公表するの？

幸い皆フェイスチェンジをしてるから、エルフ・獣人・吸血鬼・鬼
人ってのはバレてないようだけど

「これからどうなるの？」

直接父さんに聞いた方が良いと思ったので、普通に聞く

「うむ、アーサーの存在を公表する」

あっさりだな

まあ、王族・貴族に妾の子供は珍しく無いのかな？

確かゲルマニアでは一夫多妻制だったはずだし

・・・隠してた理由とか聞かれないかな？

「ほう、もう自分の立場を理解してるのか」

「頭の良い子なんですな」

兄2人がしゃがんで目線を合わせてきた

・・・あー、なんだろ？

この2人

「・・・こわい」

「なっ！」

「えっ？」

うん

自分を常に偽ってる

怖いし、気持ち悪いな

俺はそれだけ言うと、走って2人から離れた

不気味すぎだよ！

チラツと後方を見たら、2人とも驚いた表情だった
嫌な予感がするから、あまり会わないようにしよう
誕生会の間は、ずっと2人から離れて料理を食べた
何を考えてるか解らないからな！

それから2年が過ぎて5歳になった

俺は3歳の誕生会の翌日には公表された

ジヨセフ派・シャルル派が一時期騒いだみたいだが、妾の子の肩書きが思いのほか強くて『跡取りの可能性はない』って結論が出たみたいだ

俺も興味がなかったから良かったよ

因みに屋敷の俺や母さん、使用人の正体はバレてないようだ

父さんの本妻・・・大后が屋敷に来た時はかなり焦ったけど、器のデカい人みたいで可愛がつてくれた
母さんとも気が合ったみたいだ

もともと母さんと父さんは一発で俺を当てたらしい・・・それ以降無いんだと

何がとは聞かないでくれ

ジヨセフとシャルルに対しては、屋敷に来た時は寝たフリをして会わないようにして、王都に母さんで行った時は魔法騎士団の見学などをして逃げ続けた

魔法騎士団の見学をしたのは、胴体視力を高めるためだ

子供の時から体を鍛えると背が伸びないと言われてるからな

筋肉に関係無い胴体視力や感覚を研ぎ澄ました

今では飛んでる八工を箸で掴む事・・・は出来ないけど、目で追えるくらいにはなった

ってか、箸がないて無いけどね

コンコン

自室で本を読んでたら誰かが着たみたいだ

因みに自室には本やプラスチックなどが置いてある・・・パツと見、研究室だ

「どつぞ?」

「失礼します」

遠慮がちにエルザが入ってきた

「どうしたの?・・・また血でも飲みたいの?」

「いつ！ち、違つわよ！私は見境のない女じゃないよ！・・・確か
にアーサーの血は美味しくて病み付きになるけど」

顔を真っ赤にして、怒鳴るエルザ

後半はぼそぼそ言つて聞き取り辛いけどね

昔誤つて指を切つた時に、エルザが血を止めようと舐めたら高揚し
始めたんだよね

俺つて王家の血と韻竜の血のブレンドだからね

それから話し方は特別な時以外は、敬語を止めさせた

初めは遠慮してたけど、ロリババアつて呼ぶぞ？つて脅したら止めた
100歳も生きてたらババアだよ（笑）

そしたらエルザの奴母さんに告げ口しやがった

自室で寝てたら、いきなり殴り込まれて、「6000歳以上の私は
何？化石？」と笑顔で迫られた・・・あれは怖かつたなorz

「じゃあ、どうしたの？」

自分が座つてたベットをポンポン叩きながら聞く

エルザは迷わずに俺の隣に座つて・・・俺の左手首を両手で握つた
・・・なんで握るの？

「ジョセフ様とシャルル様がいらっしやいました」

困つたように言うエルザ

よしっ！

「じゃあもう寝てる事」
「ドアの外においでです」
「なっ！」

エルザが言つた瞬間、ギィと音を立てながら扉が開いた

そこには笑顔のジョセフとシャルルがいる

しかも2人の前には青髪の女の子もいるし・・・誰だよ!?

「いつも逃げられていたからね。先手を打たせてもらったよ」

笑顔で言うシャルル

俺にはその笑顔が黒く見えるよ!

「クレア殿の許可を得て専用メイドのエルザに頼んだのだ」

ニタニタ笑うジョセフ

「エルザ・・・僕を売ったな?オボエテケヨ?」

「え?私何かされるんですか?」

少しエルザの顔色が悪くなる

「エルザの夕飯は、にんにくオンリーだからな」

「虐めだ!私死んじゃうよ!?!」

おっと、それは禁句だよ

エルザが吸血鬼ってのは秘密なんだから

それから敬語じゃなくなってるね

まあ、この2人(青髪の女の子は理解できてないだろう)なら大丈夫だと思うけどね

「ほら、もう出てけ」

シッシツとエルザを追い出す

若干顔色が悪かったな
にんにくの他にもネギでも入れてやるか

「彼女はなんでにんにくに怯えてたんだ？」

いらんところで鋭いな

女の子達はビクビクしながら部屋に入ってきた

「にんにくアレルギー何ですよ。座って下さい」

女の子にはベットを、兄達には木で作られてる椅子を勧める
座る場所が無くなったので、フラスコの具合でも見るか
透明な液体が入ってるフラスコを1つ取って眺める

「其方の2人は？」

チラツとベットに座ってる女の子達の方を見て聞く
初めはビクビクしてたのに、今ではベットで飛び跳ねてるし

「僕達の娘だよ。オジさんにご挨拶を」

・・・オジさんorz

確かにそうだな

兄達の娘ならオジさんだ

「イザベラ・レーベル・ド・ガリアです」

「しゃーると・えーぬ・ど・かりあです」

うん

1人目は解ったけど、2人目は解らなかつた

「イザベラが俺の娘だ」

「シャルロットは僕の娘だよ。シャルロット・エレヌ・ド・ガリアだよ」

フラスコを置いて振り返る

「僕はアルトリア・ペンドラゴン・ド・ガリアです。よろしくね」
近付いて2人の頭を撫でると、嬉しそうに微笑んだ
まだまだ無邪気な年頃なんだろうな

「今持ってたフラスコの中身って何だい？」

シャルルが立ち上がって、並べてあるフラスコを見始めた

「自白剤の素」

「.....」

「.....」

あれ？

普通に答えただけなんだけど駄目だったの？

「アーサーは凄いのを作ってるんだね」

シャルルが冷や汗をかきながらフラスコから離れた

イザベラとシャルロットの頭にはクエツションが浮かんでるみたいだ

「昔の本を読んで参考にして、マジックアイテムを作るのが趣味なんだ」

一応理解した物は作れるみたいなんだよね
イケメン神が何かしてた1つだろうな

「そんな物を作ってしまうなんて、5歳とは思えんな」

ジョセフがジロジロ見てくる

その2人の探るような仕草が嫌だから会いたくなかったんだよ！

「今日来た用事って何ですか？娘を紹介しに来ただけではないですよっ？」

紹介だけなら王都に行った時に使用人に任せればいい
わざわざジョセフとシャルルが来る必要がないからな

「本当に鋭いね」

「うかうかしてられんな！」

何をだよ！

話が全然見えてこないよ！

「アーサー・・・お前を王都・・・リュティスに連れて行く事になった。ガリア王家の為に働いてもらうぞ」

「ちよっ！何ですか？俺は妾の子だから王家に関わらないはずで

「しよ!?!」

正式な子供が2人もいるんだから、王族に関わらなくても良いと言われたんだ

自由に生きると・・・だから此処で生活してられたんだ
自由な代わりに、王族・貴族になれないって言われた
平民メイジにしか道がないって・・・なのにいまさら!

「噂程度だけど、トリステイン王がアーサーを欲しがってるらしいんだよ」

俺はそんな噂を聞いたこと無いぞ!シャルル!

「なんで?もつと良い人材が沢山居るでしょ!?!」

ヴァリエール家・・・は女子しかないな

「今のところ、トリステイン国だけ跡継ぎがないからな。妾の子とは言え王家の血を受け継ぎ、トリステイン王の娘のアンリエッタと歳が近いから目を付けられたのだろう」

確か1つ下だったな

アルビオンの子供は男1人だから、外に出せないから俺ってか?

「それにもう5歳だろ?杖との契約もあるしな。世間体なども考えてヴェルサルテイル宮殿で契約した方が良いのだ」

がっしりと俺の肩を掴んで言ってくるジョセフ

なんで今回はこんなにも積極的なんだよ!この2人!

イザベラとシャルロットが静かだと思っただら寝てるし!

「それに親子4人で話したいって父上が言ってるんだ」

にこやかに言うシャルル

何を話したいんだろっね？

王家の話・・・特に跡取りとかの話はしたくないぞ？

ってか、俺は除外されたんじゃないのか！？

「ってなわけで、今から王都に行くよ？最低限の準備して」

「ちよっ！この子達は！？」

「クレア殿が面倒を見てくれるって。女の子が欲しかったから丁度良いつて言ってもらえたよ」

なんだと！

母さんは男では無く女が欲しかったのか！

・・・じゃなくて！

母さんも承諾したのか！

俺の正体がバレても良いのかよ！！

「ついでに此処にあるマジックアイテムも持って行こう」

俺の私物を勝手に持って行こうとするなよジョセフ！！

第4滴（前書き）

今回は前半三人称、後半アーサー目線で書いてみました

どっちの方が良いですかね？

感想待ってます！

第4滴

アルトリア・ペンドラゴン・ド・ガリアは、夜遅くに王都リュティスの郊外にある居城・ヴェルサルテイル宮殿に、馬車で向かっている最中だった

ジヨセフ、シャルルが訪問してきたその日に馬車に乗って出掛けたのだが、準備や挨拶などで屋敷を出るのが夜になってしまったのだ
アーサーが乗っている馬車にはアーサー以外に3人乗っていた

ジヨセフ・シャルルと何故かアーサーの専用メイドのエルザである普通従者であるエルザは主と同じ馬車には乗れないのだが、アーサーが無理を言って乗せたのだ・・・理由は兄2人の3人だけが嫌だったからである

席はアーサーとエルザ、ジヨセフとシャルルである

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」オロオロ

馬車の中は微妙な空気が漂っていた

アーサーは魔法媒体として母・クレアから持った指輪と契約するために瞑想をして、ジヨセフ・シャルルは持ってきていた書類を黙って見ていた

エルザはどうして良いか解らずソワソワしているだけだった

何故アーサーが今杖と契約してるのかと言うと

以前ジヨセフが言っていた世間体の杖の契約時期は、契約し終わる

時期なので今から始めても大丈夫だと言われたからである

「落ち着かないようだね？」

シャルルが書類から顔を上げて、目の前のエルザに話し掛けた
それに気付いたジョセフも顔を上げてエルザを見る
アーサーだけが気にせず瞑想を続けた

「わ、わわわ私なんかと一緒にいて良いんでしょうか!？」

ガチガチに固まったエルザが、噛みながら答える
緊張なのか、恥ずかしいのかエルザの顔は真っ赤である

「本来なら許されぬ事なのだが・・・まあ、アーサーの頼みだから
な」

「・・・ん？」

エルザの質問以外にもジョセフが答える
これにはアーサー驚いて片目を開けた

「・・・あたかも俺がワガママを言ったみたいじゃないか？」

アーサーは一度瞑想を中断して、軽く睨みながらジョセフに話しかけた

「現にそうだったじゃないか」

「そうだね。アーサーが泣きついたんだね」

ジヨセフとシャルルは、数少ないアーサーを知る機会だと思って追
い詰める

アーサーは一瞬だけ嫌な顔をして、いつも通りのしかめっ面になった

「エルザは俺の専用メイドなんだから、他の奴の顔色を伺わなくて
良いんだよ。この2人が勝手に俺の馬車に乗り込んできたんだ。部
外者はソツチだ。気にするな」

アーサーは瞑想をしながら2人に文句を言う

「ははは、これは痛い所を突かれたね」

「クハハハ、容赦がないな！」

アーサーが言うとおりに、アーサー達が乗っている馬車はアーサーの
馬車であって、ジヨセフ達が乗ってきた馬車ではない

「緊張するなら本でも読むか？」

目を瞑りながら、アーサーの横にあった本をエルザに渡す

アーサーが渡した本は地球のアーサー王物語である

アーサーが英語をハルケギニア語に書き直した物である

「・・・・・・・・」

エルザは渡された本の表紙をジッと見つめた

しかし、アーサーは目を瞑っているのでエルザが何をしているのかわ
からないので、アーサーはエルザが大人しく本を読み出したと思っ
ている

ジヨセフとシャルルはそんな2人のやりとりを黙って見ていた

「・・・プツ」

「・・・クツ」

若干笑いを堪えながらアーサーとエルザの様子を伺っていた

クイクイ

「あん？どうした？」

エルザが遠慮がちにアーサーの裾を引っ張り、アーサーが瞑想をしながら聞く

「・・・字が読めない」

「・・・」

「はははっ！」

「クハハハ！」

エルザが俯きながら言い、アーサーは呆然とし、ジョセフとシャルルは笑い出した

side アーサー

王都リュティスの郊外にある居城・ヴェルサルテイル宮殿には、翌朝に着いた

「・・・眠い」

杖との契約に集中し過ぎて徹夜してしまった

「・・・ムニヤ」

隣に座って涎垂らして寝てるし
俺の肩にエルザの頭があるら・・・涎が伝ってくるうううう!!
前を見るとジヨセフとシャルルも腕を組んで目を瞑ってる・・・寝てるな

「何で受け入れてくれないんだ？」

指輪を持って眺める

指輪にも意志があるのか、意識を繋げようとすると・・・拒まれる

Orz

簡単に言えば、指輪にフラレたんだよね

「もう着いたから起きろ」

「・・・うえ？」

エルザの頭を揺らして起こす
服に涎がベッタリだ！

「2人も起きろよ」

2人にはスネを決定起こす

「いつ！・・・乱暴だね」

シャルルがスネをさすりながら文句を言ってきた

「外にいる護衛が、何故か馬車を警戒してる方が不思議だよ」

馬車の小窓を開けて外を見る

馬車を警戒してた護衛と目が合ったので笑つとく
そしたら急いで目を逸らされた

普通護衛は周りを警戒する

兄弟でも油断できないって事だろうな

「良く解つたな？」

「馬の足音がつかず離れずだったからな。護衛なら警戒のために足音が離れたり近付いたりするからな」

最低でも1人は連絡で走り回るはずだからな

先にエルザが降りて、シャルル・俺・ジョセフの順で馬車から降りる

「馬の足音って・・・凄いね」

シャルルが驚いた顔で見てる

韻竜とのハーフの恩恵か、五感が鋭いんだよな

「陛下がお待ちです。どうぞー！」

馬車から降りると偉そうな奴が現れた
多分父さん家臣だろう

普通は兵が来ると思ってたんだけど・・・重要な話？

「エルザは荷物の搬入の手伝いをしてくれ」

「はい」

エルザが一礼した時に呼びに来た人の後に続いた
俺の後ろにジョセフとシャルルが付いて来る

「本当にアーサーは五歳に見えないね。歴戦の兵士みたいだ」

「歩き方が堂々としていて、隙がないね」

・・・その言い方だと、俺を兵士として見たよね？
じゃなきゃそんな発想しないと思うし

「2人には負けるよ。ジョセフ兄さんは武術の重心がブレない歩き方、シャルル兄さんは直ぐに距離をとるために若干重心が後ろの歩き方。俺はただ見栄を張ってるだけだよ」

2人の方を見ないで言う

戦場で2人が組めば敵無しだと思っただよね
ジョセフが前衛、シャルルが後衛

「おお！息子達よ待ってたぞ！」

宮殿の中庭で父さんがテーブルに座ってた
テーブルの上にはティーカップが4つ

あそこで話すのか？

「父上、お久しぶりです」

父さんの前で一礼する

チラツとカップの中を見たら飲みかけだ

・・・俺達が来るまで誰かがいた？

ガリア王である父さんと、優雅にお茶を飲める人物がいたって事だ・

・最低でも公爵以上のクラス
それも3人もだ

「では、場所を移動するか」

父さんが立ち上がって宮殿に入ってしまった

俺達兄弟も無言で中に入る

案内した貴族はもう居ない

滲み出る手汗を無視しながら父さんの・・・ガリア王の部屋に入った
扉が閉まった時に、中にいたのは父さんと俺達兄弟だけだった

第5滴

アーサー達はガリア王の自室で紅茶を飲んでた

1つのテーブルに男性だけで飲んでるので、むさ苦しい
そんな4人は、わりと普通に紅茶だけをもくもくと飲む

「……………」

「……………」

しかし無言でお互いに話そうとしてない
お互いにお互いを牽制し合っている

「…………ふう。何も話さないなら、指輪との契約をしたいんだけど？」

カップを置き、溜め息を吐きながらアーサーが話した

「おお！そうだったな！アーサー、指輪との契約はどうだ？」

ガリア王がアーサーに話し掛けた
純粋に興味本位で聞くガリア王

「そう言えば、馬車の中でも頑張ってたな！」

「一晩中瞑想してたしね」

「あんたら2人は寝てたんじゃないのか？」

ジヨセフとシャルルが親しみを込めて話す
先ほどの雰囲気嘘のように楽しそうに皆が話す

「少しの時間で休むようにしてるからね」

「そうしなきゃ、やっていけないからな。アーサーもいつか馴れるぞ」

豪快に笑いながら言うジヨセフとシャルル
しかし目が笑ってない
何かを諦めた目である

「そんなスキルを習得したくないし、馴れたくもないよ。それから
指輪との契約は拒否されてる感じだ」

アーサーは前衛は呆れながら否定し、後半は指輪との契約の事を話す
アーサーは自分の右中指の指輪をイジる

「拒否されてるだど？」

「ほう？契約を拒否されてるだど？俺でさえ契約出来たのに・・・
アーサーは面白いな」

「うるさいよ」

ガリア王が驚いたように聞き返し、ジヨセフが面白そうにアーサー
を見る

アーサーがジヨセフを睨む

「拒否られてるなんてあるんだね。そんな話を聞いた事無いよ・・・
いや、気付いた人が居なかったんだね」

「・・・（何故かジョセフは頭が良い事は知ってたけど、シャルルも頭が良いんだな）」

アーサーは内心動揺しながら、紅茶を一口飲んだ

「前から思ってた事なんだが、何故アーサーの真名はアルトリアなのだ？」

不思議そうにアーサーに聞くジョセフ

「・・・へ？」

アーサーは何故そんな事を言われたのか解らず頭に？を浮かべる

「そうだよな。アルトリアって女性の名前だよな」

シャルルが飲んでた紅茶を置いて、アーサーの方を見ながら言う

「・・・アルトリアって女性の名前だったの？」

「ククツ・・・まさか気付いて無かったのか？（笑）」

アーサーは下を向いてプルプル震え出す

ジョセフが、からかうように笑いながら聞く

「名前を決めたのは父さん？クレアさん？」

ジョセフとアーサーのやりとりを横目で見ながらガリア王に聞くシャルル

「一緒に決めたのじゃ。お互い女の子が欲しくての？女の子が産まれたら名付ける名前で盛り上がって、男の子名前を考えるのを忘れてたのじゃ」

うんうんと頷きながら、懐かしむように話すガリア王

「だったら、産まれた後に男だと解ったんだから、名前考えろよ！」

バンツ！とテーブルを叩きながら講義するアーサー

「アーサーが産まれる前からアルトリアと呼んでおったからな・・・一応不便だと思って愛称は男の子みたいにしたんじゃぞ？」

ドンッと胸を叩きながら言うガリア王

「嬉しくねえよ！ちゃんと男の名前が良かったよ！」

アーサーは椅子から崩れ落ちてorzポーズになった

「そんな理由だったのか」

ジョセフは納得したのか、満足そうに紅茶を飲んだ

side アーサー

俺の名前の秘密を知って、かなりテンションが下がってるアーサーです

もう気を張り過ぎて疲れたよ

始めは緊張感のある雰囲気だったのに、今では欠片もないよ
ヨロヨロと立ち上がって椅子に座り直す

「父さんが俺を呼んだ理由は？そろそろ聞きたいんだけど？」

ガリア王家の為に呼び寄せられたしか聞いてないからな
どんな理由で呼ばれたのか、全然知らないんだよ

「アーサーは父上の事を父さんって呼ぶんだね？」

シャルルが割り込んできた

別に呼び方なんて何だって良いだろう！

「ずっと父さんって呼んでたからね。それに本来なら貴族になる筈
が無かったから、貴族の品格的な物は必要なかったんだよ」

本来ならの部分強調して言った

平民メイジだから権限とか無いからね
学ぶ必要がなかったんだよ

「そう言えば、始めて会った時に気持ち悪いと言われたな」

そうとう前の話だよ！

良く覚えてたな！

「うん、あれは傷ついたね」

ニコニコ笑いながら話してるけど・・・やっぱり気持ち悪いな

「ニコニコ上辺だけの笑顔を振りまいてるんだから、気持ち悪いんだよ。自分の本心を偽って、いつも仮面を被って話す。心の中では何を考えてるかわからない」

紅茶を一口飲む・・・温くなってるな

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

あれ？

ジョセフとシャルルが驚いた表情で、黙ってしまった
俺おかしな事言った？

「・・・・・・・・ふっ」

父さんが嬉しそうに笑った？

・・・もしかしてダシにされた？

初めっから二人の関係にk気付いてて、和解させる為に俺を呼んだのか？

・・・俺の家族は全員頭が良いんだなorz

第6滴

今俺と父さんは向き合って、ベットの所で紅茶を飲んでる

間には茶菓子のチョコチップクッキーが置いてある

俺ってチョコチップクッキーよりも普通のクッキーの方が好きなんだよね

父さんはチョコチップクッキーが好きなんだと・・・余談だな
新しく入れ直した紅茶を一口飲んで、クッキーをかじる

「アーサーにはこれから貴族・王族としての教育を受けてもらう」

「今まで一切の教育を受けてないからね」

「話し方もそうじゃな。それでは盗賊や没落貴族、傭兵のようじゃ」

敬語なんて、あまり使ったこと無いからな

「アーサーは頭が良いから直ぐに覚えるじゃろ」

「頑張るよ・・・2人を止めなくていいの？」

そう言いながら横を見る

さっきまで椅子やテーブルがあつた方だ
そこでは・・・

「シャルウルウウウウ！！」

「にーさああああん！！」

ジヨセフとシャルルが素手で殴り合ってる
しかも結構強めで・・・ドカツ、バキツとか聞こえてる
2人とも顔が腫れ上がってるな

「初めての兄弟喧嘩じゃ。好きにさせる」

父さんが本当に嬉しそうに2人を眺める

・・・本気で殴り合う兄弟を嬉しそうに眺める父親
カオスだね

どうしてこうなったのかな？

そんな3人から目を逸らしながら紅茶を飲み干した

一時間前

「い、いったいアーサーは何を言い出すんだい？」

「そ、そうだな。おかしな事を言う」

2人とも動揺してるな

目が泳いでるし

「そうだね。風の噂で良い顔して裏金を使っていたり、無能を演じて
裏を動かしたり・・・ね」

紅茶を一口飲みながら話す

昔趣味で風の噂部隊ってのを作った

メンバーは基本子供や酒場の人達だ

酒場で情報を集めるのは常識だけど、意外にも子供達からも聞けるんだよね（笑）

平民の子供に政治や裏の話を聞いても理解できないからな
油断してペラペラ喋るらしい

因みに平民の子供って言っても、靴磨きの子達だね

そしてその時の俺は精霊魔法で姿を変えてた

母さんに一番最初に教わったのが変身だったからな

まあ、風の噂だから大半がデマだけどね（笑）

「・・・アーサーはどこまで知ってるんだい？」

「ククツ・・・それは認められた事になるぞ？シャルル？」

2人とも自白しちゃったね（笑）

シャルルは慌てて、ジョセフは開き直った感じだ

父さんは楽しそうに見てるだけだ

やっぱり全て知ってたんだな

「もう全部話しちゃえば？なんだったら俺が全部話しちゃうよ？」

ニタニタ笑いながら言う

ととと吐いて楽になっちまいな！・・・何となく言ってみただけだ

「・・・僕は兄さんに勝てる気がしないんだ」

どうやら先に素直になったのはシャルルの方だ

「何を言っている。勝てないのは俺の方だろう。シャルルがスクウエアなのに俺はコモンスペルすら出来ん」

へ

「ジョセフは無能だと聞いてたけど、コモンスペルは使えると思ってたよ

茶菓子のクッキーをかじりながら、2人を傍観する

「うん。僕が勝てるのは魔法だけだと思ってる！」

「お前は皆からの信頼もあるだろう！」

「だんだん白熱してきたな

「それでも僕は王になりたいと思ってるんだ！」

「それは俺も同じだ！俺はお前を負かしたい！お前を負かして王の座を得たいと思ってる！」

「僕も兄さんを完膚無きまでに負かして王になりたいと思ってるんだ！」

「やっと本性を現したか！いつも人当たりの良い態度をして！」

「兄さんだつてそうじゃないか！油断させてるじゃないか！」

「勢い良く立ち上がって睨み合う2人

「アーサーは参戦しないのかい？」

「父さんが俺に話しかける

「俺は政治とか無理だからね。だから出来る人に任せるよ」

「そうかい。此処は危ないから移動しよう」

父さんが自分のカップと茶菓子を持って立ち上がった

俺も父さんに続いて立ち上がる

そのままベットまで移動した瞬間に2人が殴り合いを始めた
後ろを向いてたから、どんな風に始まったか解らなかった

そんなこんなで、2人の殴り合いは30分続いた

「よくそこまで殴り合ったね」

2人の顔の原型が解らないよ

2人とも何か喋ろうとしてやめた

きつと口の中がズタズタなんだろうな

2人の隣で父さんが治癒ヒーリングを唱えてる

実は水のスクウェアだったらしい

蛙の子は蛙って事だね

「・・・ふう、そんなに王になりたいなら2人でなれば？」

紅茶を一口飲んでから言う・・・ずっと同じのを飲んでると飽きるね

「なっ！」

「前代未聞だぞ！」

ジョセフとシャルルが驚いた表情になる
父さんは呪文詠唱中

「何事にも始めてはあるよ。2人の王だから、双王だね」

「アーサーは王になる気はないのかい？」

「無いね」

両手を開いて答える

俺は平民メイジになりたいんだよ

「双王になると色々問題が・・・」

ジョセフの言いたい事は解る

双王になったら対立関係が生まれるからね

「正直今と変わらないでしょ？お互いがお互いを抑えるんだから今よりも良いかもよ？それに今みたいに本心でぶつかり合う相手は必要だよ。自分の歯止め役としてもね」

「しかし」

「うーん」

2人とも良い顔をしないな

「まあ、決めるのは父さんだ。王の決定は絶対なんだしね（笑）」

父さんも解ってるんじゃないかな？

確かこの国には双子は禁句ってなってるけど、兄弟でも駄目だと思
うんだよね

・・・どつちにしろ争うし

それでも兄弟にしたのは父さんだ

ほんの小さな希望に託してたんだろうな・・・塩一粒くらいの希望に
けど失敗したから俺を連れてきたって感じかな？
だから、俺もう用済みだよな？

帰って良いよね！！

その日は父さんの指示で解散した

特に俺達兄弟は文句も言わずに部屋に戻った

俺に用意された部屋に行く・・・

「何で寝てるし」

・・・エルザがベットで寝てた

今の時刻は昼少し過ぎ

一睡もしてなかったから、かなり眠いな
ベットに倒れ込んで寝た

第7滴（前書き）

後書きにオリ主のアンケートをしようと思います

よろしくお願いします

第7滴

side - アーサー -

親子会議？から数日が過ぎた

父さんから呼び出される事も無く、ジョセフ・シャルルが部屋に来る事も無く平和だった

なので、指輪との契約・マジックアイテム作りがはかどった

マジックアイテムは何となく魔剣を二本作ってみた

魔剣と言ってもナイフなのだが・・・付加した能力は念話

魔剣ナイフを持つてるもの同士が半径100キロまでなら念話可能だ

あと遠見の鏡を参考に映像付きの電話みたいのを作りたいと思って
いる

指輪は・・・まあ、なんだ？

拒絶されてるんじゃないかと、相性が良すぎた

お互いが同じ強さで扉を押ししたり、引いたりしてたから反応が無い

みたいになってた

それが解ったのが今朝だったので、父さんに契約が完了した事を言いに言ってる途中だ

コンコン

「アルトリアです」

父さんの部屋の扉をノック

ちゃんと敬語だ

解散した当日から家庭教師が来てミツチリ仕込まれたよ

「入れ」

「失礼します」

父さんの許しを得て中に入る

「兄上達も居たのですか？」

部屋にはジョセフとシャルルも居た
三人とも難しい顔だ
結構真剣な話をしてたんだな

「陛下に呼ばれてな」

ジョセフが父さんを陛下と呼んだ
じゃあ、親子としてではなく陛下・殿下の立場なんだ

「丁度良い、アーサーも聞きなさい」

「はい」

父さんが座ってる椅子の向かい側に座る
ちなみに丸型のテーブルを囲んでるので父さんの左右にジョセフと
シャルルが座ってる

「この前話してた双王の事なのだが・・・」

ビクッ
× 2

ジョセフとシャルル反応した
双王が可決したら俺はお役目ごめんの筈だからな

「・・・ジョセフとシャルルに任せようと思う」

うしっ

「そ、それは僕達2人を・・・」

シャルルの声が震える

「うむ、兄弟でこの国を何処よりも良い国にきなさい」

そう言いながら優しく微笑む父さん

ジョセフとシャルルは戸惑いながら微笑んでる

これで少しは楽になるかな？

家族問題が解決しただけでも、かなり気持ちに余裕ができた
今まで信用できるのが屋敷の人達だけだったからな

「しかし条件がある！」

また父さんの表情が険しくなった

それに合わせて2人が父さんを見る・・・うん、迷いが無いな
それにしても条件って何だろう？

「将来2人の王座のどちらかをアーサーに譲る事だ！」

・・・あんだって？

なんで俺が出てくるの？

「2人の子供は両方共女の子だ。なので、男の子が出来なければ両
方共女王になる。その時にアーサーをどちらかの王座に着かせるの

じゃ。アーサーに渡した方は血筋が王家として途絶ええると言つ事になるな」

それじゃ意味がないだろ！

また争いになるぞ！

どちらが俺に王座を渡すかで！

「そうですね。わかりました」

なんで普通に納得するんですか？シャルルさん？

当たり前って顔をしないで下さいorz

「娘とアーサーをくつつけるのも一つの手だな」

ジョセフが顎をさすりながら爆弾発言をする

「ちよっ！何を言ってるんですか！？俺達の関係は叔父と姪ですよ！？」

日本の法律では禁止です！！

「・・・まあ、王家などでは珍しい話ではないからの」

父さんが何処か遠くの方を見ながら言う

「王家では血を絶やしてはならないからな。兄妹などでも結婚してたと記録にはある。昔はより濃い血筋を！ってのがあったらしいからな」

・・・あゝ

なんとなく解るから嫌だな

始祖の血を！って言ってやってそうだもんorz
家族問題が解決して、あとはトリステイン王の婿の噂だけだと思っ
てたのに！

こんな身近な所に伏兵が！！

「なら俺が相応しい人間ならという理由でにして下さい！政治も魔
法も駄目な者が王など恥だけです！」

あえてジョセフの方をチラ見してから言う

ジョセフは政治力がずば抜けて高いから問題ないでしょ（笑）
エロでバカで自己中で独裁者？をアピールしてやる！
一生懸命駄目さをアピールして諦めさせてやる！！
・・・そう言えば、ジョセフって・・・

「・・・うむ、わかった。して、アーサーは何故来たのだ？」

来た理由も言ってなかったな

「指輪との契約が完了しました」

「あれ？拒絶されてるんじゃないの？」

「うん、逆に相性が良すぎた」

「良すぎた？」

ジョセフが頭にクエッションマークを浮かべながら聞いてきた

「うん、それは後日。それよりもジョセフ兄上は杖と契約してるん

「だよね？」

俺がさつき気付いたことを聞いてみるか

「うむ。杖と契約できたのだが、系統魔法はおるかコモンマジックさえも使えん。やはり俺には魔法の才能が無かったのだよ」

若干ジョセフの表情が曇る

「系統魔法って火・水・風・土の四つだよね？」

「そうだよ。火・水・風・土の四つと失われた系統の虚無だけだよ」

あゝ

だったら俺の予想は当たってるかな？

「多分ジョセフ兄上は魔法の才能が無かったんじゃないかって、有りすぎたんじゃない？」

「どついう事だ？」

ジョセフの目が細くなった

若干不機嫌になったな

「だって、ジョセフ兄上の系統は虚無だからだよ」

俺は初めて、いつの間にか置かれていた紅茶を一口飲んだ

「……へ？」

「・・・は？」

「ニタニタ」

ジョセフとシャルルがアホ面になった

父さんが面白いものを見たように笑った・・・ってか、ニタニタって言ったし

第7滴（後書き）

アンケートです

- 1、トリステイン・アルビオンにもハーフの隠し子あり
- 2、ありで裏設定あり。主に人体実験
- 3、無し

よろしくお願ひしますm) | | (m

第8滴

side アーサー

あー、うん

前回、余計な事を言ったかも

ジョセフに両肩を潰されんじやないかってくらい強く握られてる

「アーサー！俺が虚無だと！？どう言う事だ！！」

「兄さん落ち着いて！アーサーの顔色が青くなってるよ！」

だんだん両腕の感覚が無くなってきたな

そう言えば、ジョセフって剣の腕は上の上だっけ？

かなり鍛えてるんだな

「アーサー！」

「でえい！離せ！！」

「ガフツ！！」

足を振り上げてジョセフの顎を蹴り抜く

ジョセフは俺を落として、ヨロヨロと顎を押さえながら後ずさった

「すー…ふー…」

即座に周りの精霊と契約する

「人がせつかく下手に出てれば頭に乗りやがって！！それが人に頼む態度かよ！」

ジョセフを睨むながら言う

ずっと溜め込んでたのが爆発した

妾の子だから周りからいろいろ言われてた

俺が言われるのは良いが、母さんや屋敷の人達にも迷惑かけてたからしかも韻竜のハーフだから、屋敷から出禁だったしな

「あ、アーサー？」

シャルルが俺の豹変に戸惑いながら近付いてきた

「シャルルは邪魔だ！俺はジョセフと話してるんだ！」

side 三人称

アーサーがキツとシャルルを睨む

「アーサーの眼が！？」

シャルルは睨まれて立ち止まった

シャルルの視線の先のアーサーの瞳が変わっていた
瞳が竜の瞳のように、縦に長細くなっていた

「っ！！」

アーサーが急いで自分の眼を手で隠した

「アーサー・・・お前はいつたい」

ジョセフが膝を着きながら、アーサーを鋭く睨む
シャルルが懐にある杖に手を伸ばした

ジョセフも体から無駄な力を抜いて動けるように身構える
アーサーは誰にも聞こえないように精霊魔法を紡いで、右手に青い
炎を纏った

「・・・ウォーター」

バシヤッ！

身構える3人よりも先にガリア王が動いた
水魔法でアーサーを水浸しにした

アーサーはポタポタと髪から水を垂らしながら俯く

「全員落ち着け・・・アーサーの事は私が話す。アーサーは着替え
てきなさい」

「・・・はい」

アーサーは素直に返事をして部屋から出て行った

「2人とも座りなさい」

ガリア王がジョセフとシャルルを座らせながら座った
2人も黙ったまま従って座った

side アーサー

・・・ビシヨビシヨだ

確かにムキになって火の精霊魔法を使っちゃったけど、水浸しは酷いよ

因みに光の精霊魔法で、光を右手に集中するように屈折させて、虫眼鏡で火を起こさせる原理で火が着いた瞬間に火の精霊魔法で増幅させた

「少し焦げ目があるな」

右手の平に薄く焼けた痕がある

治さなきゃ・・・ビシヨビシヨだから水は十分、そのまま水の精霊魔法で大丈夫か？

傷を治しながら部屋に戻って着替えた

部屋では、またもやエルザがベットで寝てやがった

仕事は？と聞いたら、俺専用だから俺の身の回りの世話なんだと

確かに俺の食事を運んでるのしか見たことないな・・・着替えは自分でするし

着替えて戻るのに30分くらいかかった

コンコン

「入れ」

無言で入る

特に意味はないけど

「2人にはお前の全てを話した。母親の事、屋敷の使用人の事もだ」

それを聞いた瞬間にありつただけの精霊と契約した
そして俺の屋敷にいた使用人全員にカウンターを纏わせた
使用人の事も話したって事は、エルザ達が危ないからな
俺だけの事を話すと思っただけ、使用人の事も話すとは思ってな
かったから油断したな

「・・・それを聞いた2人はどうするんですか？」

若干声が震えてしまった

また感情が乱れてるな
瞳孔が変化してるだろうな

「・・・ふむ」

先に話したのはジョセフだった

「まずはアーサーに感情のコントロールを習得させるか・・・シャルルお前得意だろ？」

・・・おや？

予想外の返事が返ってきたぞ？

「兄さんの方が得意でしょう？無能王（笑）」

「・・・イヤミか？」（苦笑い）

あれ？

2人ともキャラ変わってない？

「ポカをやらかすのはアーサーだけみたいだからね。アーサーが隠せば他の人達も安全でしょう」

そう言いながら紅茶を飲むシャルル
ってか、ポカって知ってるんだ

「そうだな。……むしろブリミル教から抜けるか？ガリアではあまり信仰してないからな……逆に鬱陶しい」

「そうだね。視野に入れよう」

うあい！！

問題発言だな！！

「ホッホッホッ……もう今までの歴史を塗り替えようとするの
」

お前は楽しそうだな！父さん！

「根回しは後にして、兄さんの魔法の話しよう」

「そうだった！ほら！早く来て話せ！！」

子供のように手招きするジヨセフ

……うん

拍子抜けだな

せっかく紅茶の水とも契約したのに意味がなくなったな

最悪紅茶を凍らせて喉に突き付けて脅迫しようとしたのに
ジヨセフに急かされながら席に座った

「で？どうしてなんだ？」

・・・髭面のオッサンが子供のように急かすって、なんか精神的にグツとくるよね？・・・マイナス方向に

「ただの消去法だよ。火・水・土・風が駄目なら虚無って。杖と契約できたんだから魔法は使える筈なんだよ。才能が有りすぎるってのは、多分だけど虚無のドットスペルが他の系統のスクウェアスペル並なんだよ。だから今は魔力不足。コモンマジックは気持ちの問題じゃない？何事も自信がなきゃ失敗するって」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

難しい表情で考え込むジョセフとシャルル
父さんは聞きに徹してるな
参加する気ゼロだ

「確かにアーサーの言い分はわかるね」

「しかし虚無は失われた系統だ」

「ってか、失われた系統って誰が言ったの？誰も使える人がいないから？使える人が見つからなかったからじゃなくて？」

ジョセフとシャルルが頭にクエッションマークを浮かべながら俺を見てくる

「ブリミルの時代は何億、何兆の分の1人しかいなかったんだよ？

ブリミルしか使えなくて、ブリミル以外は系統魔法。使える人が見つからなくても不思議じゃないよ。それか、虚無だと気付かなくてカウントしなかったか。ジヨセフ兄上みたいに」

「・・・なるほど」

顎に手を当てて納得するシャルル

「じゃあ、どうするは良いのだ？」

なんで俺に聞くのかな？

「古代の文献とか漁ってみれば？王家に代々受け継がれてる物をキーワードに・・・例えば父さんが埋めてるルビーの指輪とか」

チラッと父さんの指輪を見る

「確かにこの土のルビーは代々受け継がれてる物だの・・・始祖の香炉つてのもあったかの」

「それだね」

いきなりビンゴゴじゃね？

「早速試さねば！」

「落ち着かんか・・・アーサーが契約できたから魔法の先生を決めなきゃの」

サツと手を引っ込めながら、そんな事をいう父さん

ジヨセフの目は父さんの指輪をロックオンだ

「あっ！それなら僕が」

12歳でスクウェアになったシャルルが教えてくれる？

「なら俺は剣を教えてやるっ」

頼んでないよ

目は父さんの指輪をロックオンしたままだし

「では決まりじゃの」

魔法と剣術

先生がトップクラス

良いのか、悪いのか

第9滴（前書き）

今回は長いです

第9滴

side アーサー

あれから2年が過ぎた

まだ7歳になってなくて、あと誕生日まで1ヶ月だ

この2年間に色々な事が起きた

1年半前にジョセフ・シャルルの母親・・・王妃が病で寝込んだ

そして半年後、父さんがジョセフとシャルルの双王を発表

発表した翌日に王妃は亡くなられた

最後に息子2人の勇士？を見られたからだろうか

幸せそうに息を引き取ってたな

さらに9ヶ月後に、今度は父さんが病で寝込んだ

ジョセフとシャルルが頑張って国を仕切ってる

出来事はこんな感じだな

変わった事はジョセフとシャルルが親バカになった事だけかな？

見てるコッチが恥かしくなるくらいだ

そう言えば、ジョセフに正妻って居ないんだって

だから、イザベラって愛人の子らしいよ

もうその愛人と結婚しちゃえよ！

俺はの感情のコントロールを一応習得したけど、念のために眼鏡の

マジックアイテムを作った

眼限定のフェイスチェンジみたいなもんだな

んで今、俺は自室のベットから起きてエルザと向き合ってる

「なんだって？」

「今日のお洋服です」

エルザが洋服を差し出してくる
全体が青で手や胸に金属が縫いつけられている・・・セイバーの洋
服だ

明らかにコスプレだよね？

「誰のデザイン？」

「昔アーサーの自室に掻いてあった紙を基に作ってみたの」

顔がセイバーと判明した時に、遊び半分で描いたやつか

「明らかに女物だよね？」

スカートみたいなのがユラユラ揺れてる

「大丈夫！アレを基にロングコートに改造しといたから」

・・・え〜

見映えが悪くならない？

エルザの顔が面白そうにニタニタ笑ってる

今度、子供先生の中等部の制服を着させてやる！・・・もしくはワ
ンピースにゴーグル付きのメットを！

ネギま！と化物語だよ

「他の服は？」

「洗濯中」

計画的だったか！！

「わかった。置いていて」

エルザは素直に従って、服をテーブルに置いて出て行った・・・エクスカリバーでも作るか？

着替えて朝食を食べてから、訓練所に移動した

今日はシャルルによる魔法訓練だ

教える人が良すぎで、たった2年で風がトライアングル、他がライオンになった

7歳でトライアングルだから、周りからの期待が高いこと高いこと俺に取り入ろうとする輩まで出てきた始末だった・・・俺に媚びを売っても得がないのにな

そう言えば、ジョセフは予想通り虚無だったな
わかった当日は、爆発魔法で地形が変わったな
子供のようにハシャいでた

「変わった服だね」

「気にしないで下さい」

私服ってよりも戦う服だからね

「それじゃあ、いつも通りフライをしてみようか（笑）」

・・・ニタニタしやがって

フライは俺の悩みの一つだ

「・・・フライ」

俺の掛け声とともに体が浮く・・・そして、俺のアホ毛が勢い良く回転する

・・・何でこうなるんだorz
ゆっくりと地面に降りる
アホ毛もゆっくりと回転を弱めた

「それじゃあ、コモンマジックから全ての系統のドット・ライン、それから風のトライアングルスペルの復習だよ」

「・・・はい」

・・・シャルルって魔法に関して天才だから
同系統なら同レベルのスペルは全て出来ると思ってるんだよな
ドットスペルなら簡単で少ないから良いんだけど・・・ラインになると面倒なんだよな

風をメインにした風・火の熱風と、エア・ファイヤー火をメインにした火・風の熱風の違いが解らない！

どっちも同じ熱風だろ！！

俺はシャルルに監視されながら、黙々とスペルを唱える

・・・
・・・
・・・

「はあ・・・はあ・・・終わった」

終わるのに3時間かった
かなりの魔力を消費したな

俺の目の前の地形が魔法によって変わってる

風だけのエア・ストーム
雷に変化させたライトニング・クラウド、ライトニング
水を混ぜたウインディ・アイシクル
火を混ぜたバーニング・トルネード
が地形を削ったな

「最後に錬金して地形を戻して終わりだよ」

戻す地形は縦10m、横5mの50だ
にこやかに言ってるけど結構な範囲だよ？

「その前に試したいのがあるんだけど」

ずっと考えてた魔法だ

「まだ余力があるんだね。次回はもっと増やすか？・・・なんだい？」

3時間ぶつ通しだったんだよ！
さらにやらせるの！？

「一応ゴーレムかな？」

右手を地面に着いて適当に呪文を言う
イメージを大切にしながら
土がモコモコ盛り上がって形作る

「これは・・・珍しいね」

出来た

普通に人型のゴーレムだけど、関節部分を土ではなく空気の塊で作ってるので棒が人型に並べられたようになってる

「風・土のラインだよ。関節部分を風にしてるから、動きに制限がないんだ」

そう言いながら、ゴーレムを動かす

普通なら動かない方にも動かせるから前後がないんだよね・・・顔ものっぺらぼうだし

「ほう・・・コレは考えたね」

ジロジロとゴーレムを見るシャルル

「こんな事も出来るよ」

ゴーレムの両肩からさらに一本ずつ腕を付ける

新しく付けた腕は手の形ではなく剣の形にしてみた

「さらに土を足した・・・メインは風だからトライアングルまで出たのかな？」

風をメインにすれば・・・

風・土・土や

風・火・火や

風・水・水も出来るのかな？

今度調べてみよう！

「面白いな。僕もやってみようかな」

シャルルが楽しそうに杖を振るつた
土がモコモコと盛り上がって形作る
俺と同じで関節部分を空気にしてる
剣の腕を鞭に変えたバージョンだな

「少しイメージし辛いね・・・手本があったから出来たけど」

俺のを手本にしたのか

「さらに風を足してみようかな？」

鞭を破棄して、8本のナイフ周りに浮かべた
・・・ガンダムのフィンネルみたいだ

「風・土・土・風？」

「そうだよ。今度からはデザインを上げてみようかな」

シャルルが杖を振るう度に、不格好だったゴーレムがリアルになっ
ていく

「なら俺は属性を変えてみるか？」

風・土・土を風・土・水にする

剣の腕を水の鞭にしてみた・・・正直楽しくなってきた
俺とシャルルは自分のゴーレムを色々いじりだした

結局俺達は昼食の為にエルザが呼びに来るまでゴーレムをいじってた

昼食後

ジョセフ・シャルル・俺の家族でお茶会をしている
週に1日、1時間だけ皆で交流を深める

そんな時間を作るのも大事だと思ったからだ

提案したら全員賛成してくれた

家族には秘密は無し！を原則にしているので、母さんが韻竜だと全
員が知ってる

勿論俺がハーフだとも、ジョセフが虚無の使い手だと言う事もだ

「お前達は子供か？」

ジョセフに呆れられながら先ほどの事を言われた

自分だつて始めて魔法が使えた時はハシャいでたじゃん

「お母さん、シャルル叔父さんとアーサー叔父さんは子供？」

母さんの膝の上に座ってるイザベラが母さんに聞く

イザベラは母さんに懐いたのか、母さんをお母さんと呼ぶ

母さんも呼ばれて嬉しそうだから問題ないだろ

イザベラの本当の母さんには同情するけど

会ったこと無いから知らないんだよね・・・愛人だったことしか

「そうね。イザベラも魔法が使えた時、嬉しかったでしょ？」

「うん」

笑顔で頷くイザベラ

「そつゆつ事よ」

「そっか」

どうゆう事？

2人だけで理解しないで

イザベラはもう6歳だから魔法の練習をしてる

系統は水でドット

順調に成長してるので、あと2・3年もすればラインになると思う
良く練習中に「私はお父さんの娘なんだからもっと上達するはずよ
」って言ってるのを見かける

イザベラにとつてはジョセフは自慢のお父さんなんだろうな
やっぱり気持ちが一番大事なんだろうな

「私も早く魔法使いたい！」

今度はシャルロットか

シャルロットもオルレアン公夫人の膝の上に座ってる

「シャルロットが5歳になったらね」

オルレアン公夫人が優しくシャルロットの頭を撫でる

「エレーヌには私が教えてあげるの！」

イザベラはシャルロットのお姉さん気取りですね（笑）

「そう言えば、ジョセフ兄上は虚無を発表するの？」

一応発表してないんだよね

「しないな。色々面倒だからな。それに家族と家臣などの少数が知

「つていればよい」

「まあジョセフがそう言うのなら良いんだけど・・・」

「兄さんがそう言うのならね」

「チラッとシャルルを見たら、俺の考えを読んできたみたいだ」

「・・・そう言えば、例の噂だが」

「・・・ああ、トリステイン王が俺を婿に欲しがってる噂か」

「一応次期王候補つてのを噂で流せば大丈夫でしょ？」

「次期王候補を婿には出来ないからね」

「別の噂もあるよ。アンリエッタ姫をガリアに渡すつて噂がね。婿が駄目なら嫁にだね」

「なんでそんなに必死なのかね？」

「嫁に出したら後継ぎが居なくなるだろ？
国が滅びるんじゃないかな？」

「ガリアと同盟を組みたいらしい。小国だから必死なんだ」

「ガリアを敵に回したくないつて事か？」

「だろっね」

俺達が話してる間、母さん達も別の話をしてるようだ
内容はイザベラとシャルロットがどれだけ可愛いかな・・・どうでも良いよ

「この件はアーサーに任せる。アンリエッタ姫が欲しければ貰えば良い（笑）」

うわっ！

父さんの血をしっかりと受け継いでるよ
楽しそうな物を見つけた顔だよ

「それから一ヶ月後のアーサーの誕生会に合わせて、僕達の即位式をしようと思ってる。もう準備も始めてるよ」

あれ？

父さんが発表したから終わったんじゃない？

「父さん発表したじゃん」

「ただだからな。あの時は母上に未練がないようにする為の発表だ。それに双王を認めさせるの根回しが一年で終わるはずがないだろう？」

・・・根回しという名の暗殺ね
反対派を皆殺し

実際俺も暗殺されかけたし・・・反対派にでも思ってたよりも反対派が少ないんだよね
1割未満なのが奇跡だった

ジョセフとシャルルが国に貢献したのが良かったのかな？
俺も幾つか助言はしたけどね

国の清掃機関を作ったり、平民でも人気の銭湯を作らせた
銭湯は貴族用と平民の二つを作ったけど・・・ほとんど大差ないけ
どね（笑）

「それから即位式にはトリスティン・アルビオン・ゲルマニア・ロ
マリアの王族・皇族や公爵なども招待してある。トリスティンとア
ルビオンの王族・公爵家の案内はアーサーに任せる。ロマリアは俺、
ゲルマニアはシャルルが案内する」

「俺で良いの？子供だよ？」

「向こうが指名してきたんだよ。案内人にアーサーをつてね」

「いいのかな？」

「わかった・・・そうだ。ある噂を流してほしいんだけど」

「どんな噂だよ？」

「どこか楽しそうなジヨセフ」

「どんな病でも治せる万能薬をガリアのアルトリアが持つてるらし
いって」

「わかった」

餌は撒いた

あとは食いつくかな

第9滴（後書き）

ヒロインを決めてない私が居る。

誰にしようかな？

魔法の成長の速さは、神から貰った才能とシャルルの指導力の賜物です。

第10滴

お茶会を終えた後、剣技の訓練をする為に訓練所に移動した
指導者はジョセフだ

幼い時から筋肉を付けると背が伸びないと言ったので、力よりも技
重視の訓練をしている

そして今日は観客が大勢いる・・・お茶会のメンバーです
全員暇だったんだと・・・王2人が仕事無いつて大丈夫なのか？
今まで1人の仕事を2人でやってるからかな？

「今日はお互いに飛び魔法は無しでの決闘式の試合だ」

使つてよい魔法はブレイド・ゴーレムなどだ

「では行くぞ？」

ジョセフが両手剣を顔の横に持っていつて、左足を引いて半身にする
俺は腰にある日本刀に握り、居合いの構えをする

日本刀は俺が玉鋼から造った一品物だ
ちゃんと砂鉄から玉鋼を造った・・・全て錬金でやったから結構偏
りがあるんだ

そしてこの日本刀は、実は妖刀だったりする

side 三人称

アーサーの体制がほんの少しだけ前のめりになった

「羽ばたけ！」

距離が10m離れているのにアーサーは抜刀した

「それは魔法だろう！！」

アーサーの妖刀・朱雀から鳥の形をした炎の塊が放たれた

ジヨセフは両手剣を大きく振りかぶって、火の鳥を剣の腹で叩き潰した

「妖刀の力と剣術だよ！」

アーサーは足の裏にカウンターを設置して、カウンターの力を利用して急接近する

某科学のナンバー1みたいにな

「先住・・・精霊魔法まで！」

ジヨセフは叩きつけからの振り上げの連続攻撃でアーサーの接近を防ごうとする

しかし、アーサーは斬撃を恐れずに間合いを詰めた

「ジヨセフの魔法は面倒だからな！（加速を使われたら着いて行けないからな！）」

アーサーは力では勝てないと知ってるので、反撃を与えないように連続で斬り掛かる

ジヨセフは間合いを入られて両手剣を上手く扱えていない

「チツ！・・・加速！」

ジョセフは一度大きく後退してから、虚無の加速をした
ジョセフはアーサーの背後を回って思いっきり蹴り飛ばした
アーサーは体を浮かせて少しでもダメージを減らそうとしたが失敗
して体を壁に強く打ち付けた

「かはっ・・・大人気ないでしょ」

朱雀を杖代わりにして立ち上がるアーサー

朱雀の刀身が赤い炎に包まれる

「やっ和本気か」

ジョセフはマントを外して、邪魔だと言わんばかりに放った

アーサーは朱雀を左手に持ち替えて、懐から柄だけの物を取り出した

「ちょっと今のはイラッてきたよ（笑）」

楽しそうに言うがアーサーの目は笑っておらず、瞳孔が縦に長細く
なっている

ちなみに眼鏡は始まる前に、危ないからと外してシャルロットに渡
していた

なのでシャルロットは今眼鏡を掛けている・・・余談である

「ブレイド」

柄から真っ黒い刀身が生えた

形は日本刀のように反りがある

「ぶっ！」

ジョセフが加速による移動で消えた

消えた次の瞬間にアーサーの右側に現れて剣を振り下ろしてた

「チツ！」

しかし、ジョセフは振り下ろしを中断して後ろに大きく跳んだ

アーサーの肩・肘・膝・背中・アホ毛などありとあらゆる所から真っ黒い刀身が現れて、全方位をカバーしていた

「早いだけなら対処は出来るんだよ！」

アーサーは全身の刀身を引っ込めて、右手に持っているブレイドを横に振るう

ブレイド着地しようとしているジョセフを追うように刀身が伸びる

「アーサーの戦い方は予想できんな！」

ジョセフは楽しそうに笑いながら向かってきたブレイドをカチ上げたカチ上げられたブレイドは直ぐに元の長さに戻った

「朱雀！」

アーサーはまたカウンターを理由して接近する

その際に広範囲に妖刀・朱雀の炎を撒き散らして逃げ場を奪う

「さらに炎上！」

アーサーとジョセフが剣を交えた瞬間に、アーサーは妖刀・朱雀を地面に突き刺した

アーサーが片手に対してジョセフは両手で剣を持っていたので、アーサーはあっさり力負けして吹き飛ばされる
しかし、吹き飛ばされた瞬間にジョセフを火のドームが包んだ

「全ての魔力を込める」

アーサーは両手でブレイドを構える
ブレイドは巨大な剣へと形を変える

「デイスペル！」

ジョセフの呪文で火のドームが解除された

「これで終わりだ！」

火のドームが解除された瞬間にアーサーが巨大な剣となったブレイドをジョセフに振り下ろした

「……………」

しかし巨大な剣はジョセフに当たらず途中で止まっていた

side アーサー

腕がこれ以上進まない

この押し返される感覚は……

「母さんのカウンターでしょ？」

「あら？わかったの？・・・それよりエルザちゃんが迎えに来てるわよ」

お互いに剣を仕舞いながら、母さんの視線の方を見るとエルザが居た

「ガリア王がジョセフ陛下、シャルル陛下、アーサー殿下の3名をお呼びです」

次期王候補にするために、ド・ガリアを名乗る必要があるらしいだから俺は公爵ではなくて殿下・・・王子なんだよね

「わかった」

「なかなか楽しかったぞ」

ジョセフが服を叩きながら俺の頭をガシガシ撫でた

場所を移動して父さんの寝室

「ジョセフ、シャルル、アルトリア3名ただいま参りました」

代表してジョセフが言う

ジョセフとシャルルは同格だけど、父さんと話すときは兄だったのでジョセフが代表になる

「・・・ふう、私の時間はもう少ない・・・しかし1ヶ月後の即位式には元気な姿で出たいのだ」

ベットで上半身だけを起こす父さん
最後の門出に弱々しい姿を見せたくないんだな

「アーサー。お前は特殊なマジックアイテムを造ってたな」

「はい」

「……どうにかできないか？」

「一応ありますが……それなりの対価が必要です」

「アーサー！実の父に対価を求めるのか！？」

「そうだよ！父上が無理をしても出ようとしてるんだよ！」

2人とも父さんの覚悟がわかってるんだな

「言い方が悪かったね。それなりの副作用があるんだよ」

「副作用？」

「うん。普通は長生きする為に残りの命を少しずつ削るんだけど……」

これはあまりオススメ出来ない……いや、したくない！

「……なるほど。そう言うことが」

ジョセフはわかったみたいだ

「どうゆう事だい？」

「残りの命を節約しないで一気に使っただよ。その為・・・寿命は縮まる」

「なんじゃ。そんな事が。かまわんよ」

ニツコリ笑いながら言う父さん

その父さんの笑顔が眩しく感じるのは俺だけだろうか？

その後少し話してから部屋を出た

薬を服用するのは即位式当日だけになった

部屋に戻る時2人とも暗かったな

だけど、話してる時は覚悟を決めた表情だったから大丈夫だろう

俺は今までみたいに自分の事を考えてれば良いのか？

・・・そろそろ俺も覚悟を決めるか

第11滴(前書き)

朝7時に書き上がった・・・し、死ぬ！

第11滴

あれから1ヶ月が過ぎた

今は俺の誕生会と即位式の場所のラグドリアン湖に向けて馬車は移動中だ

父さんは体調の事も考えて竜籠で後から来るらしい

そう言えば、母さんが妾から正式に王族に迎えられた・・・どうゆう立場で迎えられたか教えられてないんだよね

内容は非公式だし

母さんの立場発表も即位式に発表するらしい・・・ジョセフが嫌な予感がするんだよね・・・俺が引き籠もりになるような

「アーサーは何を読んでいるんだい？」

馬車と一緒に乗ってるシャルル話しかけられた

馬車は王族を男女別に別れて乗ってる

だから俺、ジョセフ、シャルルの3人とシャルロット、イザベラ、母さん、オルネツラの4人だ

因みにオルネツラはシャルルの奥さんだよ

本名オルネツラ・ド・ガリア

「屋敷にあつた虚無と使い魔の記述があつた本」

背表紙を2人に見せながら言う

タイトルは掠れてて読めないけどね（笑）

「アーサーが虚無に興味があるとは思わなかったな」

意外そうに言うジョセフ

「虚無には興味ないよ。歴史に興味があるんだ。思わぬ拾い物がったりするしね」

ポンポンと妖刀・朱雀を叩きながら言う

普通妖刀はただの刀が怨念などで呪われて出来る刀だ

だけど朱雀は造られて2年

呪われるほど生き物を斬ってない

何に妖刀になってるのは、特殊な素材を使ってるからだ

「確か東方の技術で造った剣だっけ？」

シャルルが朱雀を見ながら言う

「さらに東方の伝説の生物の朱雀の羽の化石を使ってるんだ」

「朱雀って・・・あの朱雀かい？」

「韻竜と一緒に絶滅したとされてる朱雀だよ。四聖獣の一柱だね」

朱雀の他に玄武、白虎、青龍も絶滅したと言われている

朱雀が火を司る

青龍が水を司る

白虎が風を司る

玄武が土を司る

って言われてる

前の世界とは違うみたいだ

「確か朱雀は死ぬ時燃え上がると聞いた筈だが・・・化石があったとは」

ジロジロと朱雀を見る

「化石にされた怨みが宿ってるんだよ。因みに青龍は水の韻竜って説もあるんだよ」

「では、何処かで絶滅してない四聖獣がいると？」

母さんが韻竜だからね

否定は出来ないよ・・・何の属性が知らないけど

「今回気になったのは使い魔の方だよ。ガンダールヴ、ヴィンダールヴ、ミヨズニトニルン、リーヴスラシルの4人は人、もしくは亜人だったんじゃないかと思う」

「何故そう思うんだい？」

「・・・母さんが言ってたから」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

2人とも納得したような表情だ
だって生き証人だしね

「それにリーヴスラシスは解らないけど、ガンダールヴは武器、ヴィンダールヴは騎獣、ミヨズニトニルンはマジックアイテム・・・
全て人が使う物を使ってたらしいからね」

「なるほどな・・・歴史もバカにできないって事か」

「ジョセフ兄上は誰が来てほしい？」

「使い魔か？・・・ミュズニトニルンだな」

意外だな

好戦的なガンダールブだと思ったよ

「理由は？」

「ガンダールブは剣を扱う俺はいらぬ。ヴィンダールブは俺が操れば問題ない。マジックアイテムはどうにもならんからな」

ジョセフは前衛タイプだからな
お互いに前衛なら居ない方が良いか

「因みにシャルル兄上は？」

「僕だったらヴィンダールブだね。僕は騎竜に乗って戦う方が得意だから」

完璧な魔法使いタイプだな

騎竜に乗って後方からスクウェアスペルを打つシャルルが目につかぶ

「アーサーはどうなんだ？」

俺か・・・俺は

「ガンダールブだね。ヴィンダールブは俺の中にある竜が持ってかれそうだし、ミュズニトニルンは俺がマジックアイテムを造ってる

から使い方はわかるし・・・残りのガンダールブ」

「全員分かれたね」

「リーヴスラシスはいなかったな」

「しょうがないよ。よく解らないんだし」

「そうだね・・・そい言えば、大砲と砲弾を持ってきてるらしいね？」

「なに？祝いの席で何をする気だ？」

シャルルの言葉でジョセフが俺を軽く睨む

「悪いものじゃないよ。即位した2人へのプレゼントだよ。どんな物かはお楽しみに」

ハルゲギニアには無いものだ

日本では当たり前前にあつたものだけだね（笑）

それから話しながら数日かけて、ラグドリアン湖に向かった

ラグドリアン湖に着いて、翌日にトリスティン・アルビオン・ロマリア・ゲルマニアが来たので、別れて迎えに行く

「2人とも大人しくするんだよ？」

「うん」

「わかってる！」

何故かイザベラとシャルロットが付いて来たけど・・・問題ないだろう！

ちょうどトリステインとアルビオンが一緒に来てたので両国の前に立って一礼

「遠路はるばる起こし頂き誠にありがとうございます。案内はこのアルトリア・ペンドラゴン・ド・ガリアが致します」

頭を上げて笑顔で挨拶をする

「そして今回即位されるジョセフ陛下の姫君のイザベラ・レーベル・ド・ガリアです。私の後ろに隠れているのがシャルル陛下の姫君のシャルロット・エレヌ・ド・ガリアです」

横で凜と立ってるイザベラと、俺の後ろに隠れてるシャルロットを紹介する

イザベラは見えないように俺の服を握ってるけど

「ほう？7歳でこれほどまでとは・・・私はトリステイン王のシャナエル・ド・トリステイン。王妃のマリアンヌと娘のアンリエッタです」

トリステイン王が先に挨拶してくれた

マリアンヌ太后はニコニコしてるけど、アンリエッタは眼がキラキラしてる？

何か吹き込まれたかな？

それから俺をちゃんとガリアの代表と認識してくれてるな

子供だから見下されると思ったんだけどな

「私はアルビオン王のジェームズ・デューダー。息子のウェールズです」

アルビオンの方も認識してくれてる・・・いや、両方とも見定められてるのかな？

始めっから見下されるよりは良いか
それよりもウェールズがイザベラに熱い眼差しを・・・

「私はトリスティン公爵家のピエール・ド・ラ・ヴァリエールです。そして妻のカリーヌ、長女のエレオノール、三女のルイズです。次女は体調が悪いので失礼ながら欠席にさせてもらいました」

「いえ、お気になさらず」

両王家の挨拶が終わったのを確認してから挨拶をするピエール
カリーヌは優雅に一礼

エレオノールは緊張してガチガチだ
ルイズはエレオノールの行動で頭にクエツションマークを浮かべてる
ルイズの中では2番目に偉いのがヴァリエール家だと思ってるからな
まさにエツヘン！って感じで立ってるし
以上みたいだな

モード大公も来ると思ったんだけど

「弟のモードは少し遅れてきます」

キョロキョロする俺を察してジェームズが教えてくれた
キョロキョロって言ってもアルビオンの後ろの方を見てたからな

「そうですね。ではお荷物をお運びします・・・レビテーション」

複数の荷物を一斉に浮かせた

「複数の魔法を同時使用だと！」

ピエール・・ヴァリエール公爵が声に出して驚いた

他の人も声には出してないけど驚いてるみたいだ

イザベラとシャルロットは驚いてないけどね

「一つの魔法ですよ。ゴーレムなどと同じです。一つの呪文で複数
を動かす」

これを意識すれば、ファイヤーボールを複数出す事も出来る・・・
シャルルがエアハンマーを複数出せてたし

「では付いて来て下さい」

先に歩いて案内する

「どのテントも小さいですね」

案内してる途中で、周りのテントを見ながらトリスティン王が言う
テントは3m x 3mくらいの大きさだ

「あれは私が造ったマジックアイテムです。外に比べて中はかなり
広いんですよ？」

ハリーポッターのテントです

ヤケになってた時にネタで造ったら、ジョセフ達に見付かって大量
生産した

エルフ、吸血鬼、翼人などの精霊魔法が使える人、総動員で造った
一番多く造ったのは母さんだったな
6000年はダテじゃない！！

それから案内して俺の誕生会は安全に行われた

第11滴（後書き）

もうアンリエッタとウェールズが出会ってしまったorz
原作だと3年前・・・14歳なのに

第12滴(前書き)

ストックが無くなりましたorz

第12滴

今回の誕生会と即位式は合わせて4日間の予定らしい

1 日目は俺の誕生会

2 日目はジョセフとシャルルの即位式

3 日目、4 日目はパーティーとなっている

1 日目の俺の誕生会はいつもと変わらず過ごした

単純にいつもよりも人が多かっただけだったので受け答えして流した
プレゼントと宝石やマジックアイテムなどだった

俺の事を少しでも知ってる人は良い物を持ってきてない

エルザは本だったし

一番面白かったプレゼントはルイズだった

汚い字で『おたんじょうびおめでとぅ』って書いてあった

それを手に持った時ヴァリエール公爵が慌ててたから、ルイズが勝
手に置いたのだろう

「す、すすすすいません！」

「ひくっ……うっ……」

ヴァリエール公爵が俺に頭を下げる

ルイズが横で泣いてる

「何を言ってるんですか？こんなに気持ちが悪められてるじゃない
ですか」

ヴァリエール公爵に見せながら言う

「他人に頼らずに、自分の出来る事で祝ってくれたのです」

大切に折り畳んでプレゼントの所に戻す

「それよりも私の誕生会を祝って下さい」

ニッコリ笑ってヴァリエール公爵を宥める

まだ難しい表情のヴァリエール公爵

「では、姪のイザベラとシャルロットの友達になって下さい。同年代の女の子がいないんですよ」

イザベラとシャルロットを手招きながら言う

王族の遊び相手として公爵家の子供が呼ばれたりするけど・・・従姉妹だったので呼ばれなかったんだよね

お互いがお互いの遊び相手

しかも遠慮がいらぬ相手だからな

「ルイズは私のお友達です！」

どっからかアンリエッタが現れた

ルイズを後ろから抱き締めながら言うてきた

「それでは女の子同士で・・・私はアルビオン王子の所に行きますので」

そう言つて4人から離れた

けして気まづかったからではない・・・アンリエッタの後方でトリステイン王が真剣な眼差しで見てたからだ

あれはアンリエッタを焚き付けたな

因みにヴァリエール公爵は、アンリエッタが来た時に一礼してから

離れていった

少し会場を歩いてウェールズを捜す
意外にも近くに居た

「楽しんでくれてるかい？」

ウェールズにオレンジシユースを渡しながら話す

「あ……えつと……」

いきなり話し掛けられてしどろもどろになるウェールズ
チラチラと父のアルビオン王を見てるな

よく考えたら俺って7歳で、ウェールズは6歳なんだよな
もつと子供っぽくしなきゃ駄目かな？……今さら遅いか

「堅くならないでくれ。お互い歳は近いのだから」

「……はい」

気まずそうにオレンジシユースを飲むウェールズ
オレンジシユースを飲みながら、ある一定の場所を見てるな
ウェールズの目線の先を見ると……またイザベラだ

「イザベラがどうかしたのかい？」

「い、いえ！何でもないよ！」

めっちゃ動揺してるな

まさかイザベラに一目惚れ？……ませガキが
でも面白そうだから応援しよ

「……ウエールズとイザベラをくっつければ、イザベラはアルビオンに行く」

「ジョセフ側の王座が空席」

「姪との結婚回避？」

「親近相姦フラグをへし折るぜ！！」

「つて事で、その後ウエールズを連れて4人と合流して話し過ごした」

「アーサー！俺とシャルルからの誕生日プレゼントを発表するから来てくれ」

「十分にイザベラのウエールズの好感度を上げた時にジョセフに呼ばれた」

「他人から友人になつたな……普通か」

「僕達のプレゼントは此処だよ」

「2人の前に着いた時に、両手を広げたシャルルに言われた」

「周りの人達も俺を見てる」

「……此処？コレじゃなくて？」

「しかも目の前には何も無いぞ？」

「シャルル兄上何も無いですよ？」

「周りをキョロキョロする」

「何を言っている？こんなに大きくあるではないか！」

「……おや？」

「嫌な予感がするぞ？」

「アーサーにはド・オルレアンをプレゼントするよ やったね 良かったね」

親指を立ててサムズアップするシャルル
なんだろ・・・腹立つ

「プレゼントって・・・任せるって事？」

「そうだな。7歳で領主だな」

ニタニタと楽しそうに笑うジヨセフ
やべー、あの髭むしりたい！

「・・・家臣、居ないけど？」

反対しない

しても変わらないから

「エルザが居るだろ？」

「は、はい!？」

他のメイド達と一緒に働いていたエルザが驚いて声をあげた

「やったねエルザ。ただの専用メイドから、家臣で専用メイドにランクアップだつて」

エルザの方を見ながら言う

そしたらエルザは金魚みたいにパクパクしてる
家臣で専用メイドって何だろうね？

「まあいいよ。自分で家臣を選ぶから」

どんな家臣にしようかな？

戦闘系？政治系？奉仕系？

アーサー馴染みで円卓の騎士にして12人にしようかな？

ちよつと楽しみだ（笑）

それから俺にアプローチしてくるガリア貴族が多かった

次期王候補の家臣だから必死なんだろうな

それでもアプローチに来るのは長男ではなく、次男・三男が多かったな

後ろ盾が無い分必死なんだろうな

とりあえず家臣に決定してしまったエルザの身が危なかったのだから近くに置いといた・・・エルザって貴族になったのかな？

一応精霊魔法だけど魔法が使えるから、平民メイジだったって言えば大丈夫かね

俺の誕生会が終わって俺は割り振られたテントで本を読んで休んでるテントの中には俺とエルザ、そして護衛として公爵家の次男が居るエルザは紅茶の準備をして、次男坊はガチガチになって隅で立ってる

「そう言えば名前は？」

ベットに寝ながら、本から次男坊に視線を移動させて聞きたつきアプローチに来なかったから名前を知らないんだよね

「あ、アロイジウス・カイヴァント・ド・ラーフラデアです」

「あれ？公爵家なのに名前が短いね？」

普通はもつと長いと思うんだけど

良い例がトリスティンのヴァリエール公爵家だな

「私は妾の子ですから」

俯きながら言うアロイジウス

妾の子か

ジョセフかシャルルがワザと俺の護衛にさせたな
多分俺に拾えって事だろうな

「ふーん・・・歳とクラスは？」

ふーんって言った時にビクッてしたな

「じゅ、13です！水のラインです」

13で水のライン・・・優秀ではないか

本をパタンと閉じてアロイジウスを見る

ビクビクしてる・・・なんかゾクゾクしてきた！

テンションも上がってきた！！

アロイジウスは髪が茶髪で耳が隠れるか隠れないかくらいの長さで、

普通に中の上のイケメンだ

魔法媒体は剣を腰に下げてるから杖じゃないだろう・・・相手に気
付かせないってのが良いな

わかったら奪われて終わりだし

「よし決めた！お前俺の家来になれ」

家臣はちゃんと決めるとして、家臣候補は集めとかないとな
アロイジウスはポカーンとしてる

確か円卓の騎士って12人だからあと10人か

まだまだ先が長いな

エルザが入れた紅茶を飲みながらこれからの事を考えた

第12滴（後書き）

アーサーの名前が、アルトリア・ペンドラゴン・ド・ガリアから、アルトリア・ペンドラゴン・ド・ト・ガリアオルレアンになりました！

近々アーサーの造ったマジックアイテム表でも書こうかと思っ
てます

第13滴(前書き)

2日ぶりです

第13滴

翌日は午前と午後は誕生会から即位式の設備？の取り替えなので、即位式は夕方からとなっている

準備するのはガリアの国民（貴族・平民差別なく）がするので、他国の人は王家・公爵家がプチガリア案内をしている

プチガリア案内と言っても周囲の事や、最近取り入れた出来事（外にバレても大丈夫なもの）を説明するだけだ

俺も本当はトリスティン王家・ヴァリエール公爵、アルビオン王家・モード大公などの案内をしなければならぬのだが、やることがあったので一言言って失礼させてもらったのだが・・・

「なぜ他の人が居るのですか？」ヒソヒソ

エルザが俺の耳元で聞いてくる

アンリエッタ・ヴェールズ・エレオノール・ルイズが俺の作業を見たいと見学に来やがった

場所はラグドリアン湖の近くだ

彼女等の親達は双王のメリット・デメリットに興味があるらしくジヨセフとシャルルに付いて行った

「一応ゲストだから無碍には出来ないんだよ」

4人に聞こえないようにエルザと話す

「アルトリア様。私達がいたら迷惑ですか？」

最年長のエレオノールが戸惑いながら聞いてきた
場の空気を読んだんだろう

「大丈夫ですよ・・・エルザ、シャルロットとイザベラの方を頼む。俺は水の精霊に試してみるから」

前半はエレオノールに、後半はエルザに言う

イザベラとシャルロットは浴衣の採寸の最終調整だ

場違いな工芸品で浴衣・甚平が数着流れてきた

それをエルザに解析と量産を任せたら2週間で完成させた

セイバーの服を改造とはいえ、落書きから再現したからもしかして
と思ったら大当たりだった

どうやらエルザは洋服関係でずば抜けて才能があるみたいだ

水の精霊に会いに行くのは、バカ騒ぎをする謝罪と俺が領主になっ
たから挨拶だ

「4人は僕に付いて来て下さい・・・水の精霊に会えるか試すので」

水の精霊だから、精霊魔法の応用で話す事くらいは出来るだろう？・

・・・自信はないけど

「アルトリア様の活躍は、トリステインにまで広がってますよ」

目立つ事はしてないんだけどな

何が有名になってるのかな？

「アルビオンでも有名ですよ。特に空気中から水を作り出すマジック
アイテムは助かってます」

アルビオンは常に島から水が流れ落ちて霧になってるからな

水は貴重らしい

気分で造っただけだったけど喜ばれるのは嬉しいな

「二つ名もあるんですよ。『魔具』、『死神』、『開祖』！ですわ！」

キラキラしながら言ってくるアンリエッタ・・・特に『開祖』に力が入ってた

・・・何ですか？

その自殺したくなる二つ名は？

『魔具』はマジックアイテムだろうけど、『死神』と『開祖』ってなんだ？

心当たりが全然ないんだが・・・

チラッとエレオノールを見たら、気まずそうに目を逸らされた・・・
言えない事！？

「『死神』の内容は知りませんが、『開祖』は崇めてる人が呼んでるらしいです」

ヴェールズ君説明ありがとう

なんで崇めてるの？

「アルトリア様が『Fate stay night』、『灼眼のシャナ』、『コードギアス』などを書いてるんですか？」

もじもじしながらアンリエッタが聞いてきた

ずっと黙ってるルイズを見ると緊張してるみたいだ

手と足が一緒に出てる

昨日は普通だったのに・・・全員が王族ってわかったからか？
ってか・・・

「全部俺が書いた小説だな」

マジックアイテムを造る時の資金を集める為に書いたんだよな
小説を選んだ理由は、昔エルザに訳したアーサー王物語を思い出したからだ

コツチに原本があつたから出来ただけだね

「やっぱり開祖様ですね！『Fate stay night』の
続編はあるんですか!？」

喰いつきてきた!？」

もしかして崇めてるメンバーの1人ですか!？」

崇めてる人達って・・・オタク達ですね!

エレオノールもアンリエッタの斜め後ろで尊敬の・・・貴様もか!!

「・・・今は明日のパーティーの準備がありますので」

早足でラグドリアン湖に向かう

俺に置いてかれないように、4人も早足で付いて来た

「じゃあ、全員少し後ろに下がって下さい」

ラグドリアン湖に膝下くらいまで入りながら言う

「どうやって会うつつもりなのですか?」

不思議そうにエレオノールが聞いてきた

他の3人は、純粹に水の精霊に会える事を楽しみにしてるみたいだ
普通、水の精霊に会えるのは契約してる『家系』だけだからな
俺は契約してる『家系』じゃないからな

「いろいろ試してみます」

side 三人称

アンリエッタ・エレオノール・ルイズ・ヴェールズが見ている前で、
アーサーは腰からナイフを抜き取り自ら自分の左掌に突き刺した

「き、きゃー！！」

「……………」

「君は何をしてるんだい!？」

ルイズが顔を青くして叫んで、エレオノールは口をパクパクとさせ
て何も喋れない

アンリエッタは目眩を起こしたのかフラつき、ヴェールズはアーサ
ーを指差しながら怒鳴った

「結構神経をすり減らすから黙っててくれ」

アーサーは目を瞑って、ナイフを抜いた左手をラグドリアン湖に浸
した

「出血してる手を水に浸すなんて!！」

「入ってくるな!」

ヴェールズが慌ててアーサーを止めるようとラグドリアン湖に入る

うとする

しかし、アーサーはウェールズを睨んで入ろうとするのを止めた
メガネを下にズラして睨んでるので迫力がある

「すう・・・」

アーサーはウェールズがラグドリアン湖から出たのを確認してから
目を瞑った

アーサーは無理矢理従わせないで、話しかける感じでラグドリアン
湖全体を魔力で刺激し始めた

アーサーがラグドリアン湖を刺激し始めて1時間が経過した
出血したまま手を湖に入れてるので、アーサーの顔は真っ青である
しかも湖に浸かってる分、体力の消費も激しい
アーサーは精霊魔法を使って体温低下を抑えて、出血も最小限にし
ていた

「もう・・・限界だな」

アーサーが諦めて左手を引き抜こうと瞬間、アーサーの目の前の水
が盛り上がった

side アーサー

やっと来たか

血を流しすぎて出血死するかと思ったよ！

水の精霊はボコボコ姿を変えて・・・子竜の姿になった
なんで竜？・・・母さんの血か？
では言い直そう・・・なぜに竜？

『単なる王の者、空を征する者、二つの血の混血か』

嫌な言い方をされた

「1時間も無視をされたので、もう駄目かと思いましたよ」

ヒーリングで傷を治しながら嫌みを言う

後ろにいる4人派それぞれ別の行動をしてるな

ルイズは飽きて寝てて、エレオノールは治療の準備をしてた

アンリエッタとウエルズは杖を取り出して俺を直ぐに救助できる
ようにしてた

・・・ルイズ酷くね？

『今まででは有り得ない血だったので迷ったのだ・・・本当に混血
か、我を惑わす偽りか』

警戒心強いな・・・6000年も生きてれば色々あるか

そして余計な事を言わないでほしいな

俺が韻竜とのハーフってバレルじゃん！・・・まだ幼いから理解で
きないか？

「んじゃ、言いたい事だけ言わせてもらおうわ。ガリア側でラグドリ
アン湖の管理を任されたアルトリア・ペンドラゴン・ド・ガリアだ。
そして明日少しウルサくなるから宜しく！」

親指を立ててサムズアップして言った

言いたい事は言ったし、もう行くか
後ろでわたわたしてる奴らもいるしな

『・・・それだけか？』

ふるふる震えながら音を発するって便利？不便？
どっちかね？

「先住者が居るんだから、挨拶に行くのは当たり前だろ？」

何変なことを言ってるのかね？
この人は？・・・人じゃないか

『気に入った。持って行け』

またプルプル震えて拳大の水の塊を浮かせて目の前に持ってきた・・・
・どうやって持ってけと？

『魔力を込めれば面白い者になる。水の聖霊の加護だ』

・・・あれ？

字が違う気がするぞ？

話してるから間違ってるか解らないけど

とにかく右手を突っ込んで魔力を流す

ぐにゃぐにゃと形を変えて玉ねぎのような姿になった・・・スライムだ

『始めて見たな。普通は小魚とか蛙の姿になるのだが・・・顔もあるし』

本当は形だけだったんだ

確かにドラクエでもスライムは好きだけど・・・弱そうだな

「名前はスラおだな」

それしか思い付かん！

スラおは固形なのか、液体みたいに指から流れ落ちない

「ピギイ！」

鳴いて俺の頭に飛び乗った

コイツ自分の意志があるんだ・・・今生き物を創った？

『大切にしてくれ』

水の精霊はそれだけ言うたらグドリアン湖に戻っていった・・・戻るか

戻った時にスラおの事を聞かれたから、迷子だったのを預かったって言つといた

今まで見た事無い生き物だから珍しがられた

ジョセフとシャルルの即位式は無事に始まった

病で倒れてる父さんが元気に現れた時は騒ぎになったが、直ぐに落ち着いた

それからウァリエール公爵からの視線が多くなったな・・・昔に撒いた餌には喰らい付いてたみたいだな

そして今は、即位して新しい法律？を2人が発表してジョセフが大事な話があると言つたので静かに待つてる

「俺はクレアと結婚する。なのでクレアを妃として王族に迎える！」

あの子、ナンテイッタ？
……

第13滴（後書き）

・・・どうしよ

やっってしまった

兄弟から親子に？

叔父、姪から兄妹に？

しかし後悔も反省もしないorz

第14滴

俺はジョセフの発言でパニックになって、皆より先に失礼させても良かった

俺の家臣？のエルザとアロイジウス・カイヴァント・ド・ラーフラデアの2人も俺の後に付いて来た

詳しい話は明日聞くとして、気持ちの整理をしなきゃな

ジョセフは自分の行動はちゃんと理解してるはずだ

普通に結婚するなら、こんな時に発表する必要は無いしなきゃいけない理由があった？・・・見せしめか？

「どうぞ」

エルザが紅茶を入れてくれたみたいだ

「ありがとう・・・例の物はどう？」

「服の方は少し遅れてるわね。私一人だから・・・イザベラ様とシヤルロット様の分だけなら問題ないわ」

エルザが紅茶を飲んだ

良く見たら紅茶は3つ用意されてた

「アロイジウスもコッチに来て座りなよ」

アロイジウスは入口の近くで外を警戒してた
ちゃんと護衛をしてるんだな

「しかし・・・殿下と一緒になど・・・」

気まずそうにするアロイジウス・・・アロスでいつか

「エルザが入れた紅茶が冷めちゃうよ？」

エルザの方を見るとニコニコしながら足をぶらぶらさせてた

「エルザにも言った事だけど、俺はなるべく上下関係をなく話したいと思ってるんだ。これは双王も同じ考えだし、そもそもその考えの基双王が決まったんだ。自分に遠慮なく言ってくれる存在って大切なんだよ？まあ、皆の前ではちゃんとしなきゃ駄目だけどね（笑）」

チヨイチヨイと空いてる椅子を指しながら言う

「紅茶を粗末にすると怒るよ？・・・エルザが」

「私が！？」

大声を出すエルザ

「具体的には噛み付かれるよ」

「うう・・・否定できないよ」

エルザは怒ると直ぐに噛み付くんだよね

吸血鬼だからしょうがないのかもしいけど・・・結構痛いんだよね

血を吸うための噛み付きじゃないから、麻痺剤みたいのがないらしい
吸う時の噛み付きは、唾液から特殊な成分が分泌されて快感を与え

るんだって

因みに俺が血を与えるときは、刃物で指先を斬っておしゃぶりみたいに吸わせてる

「では、失礼します」

アロスが怖ず怖ずと座った

「アロスにはいつか俺達の秘密を話すと思うから覚悟しててな」

紅茶を飲みながら言う

「アロス？・・・秘密ですか？」

「そつ 誰かに言ったらアロスと言った人を暗殺しなきゃいけない程の秘密・・・そんな秘密を墓場まで持って行かないといけないアロス。可哀想だNE（笑）」

「全然思ってますんよね？」

溜め息を吐きながらも承諾したのか紅茶を飲みながら頷くアロス

「これは本当ですからね？」

「は、はは・・・ヤバい処に入ったかも」

ニツコリ笑いながらアロスに言うエルザ

うん、目が笑ってないね

かなり怖いよ

アロスも乾いた笑みを浮かべてるし

「言わなければ良いんだよ。それから明日はアロスにも手伝ってもらってから」

「はっ！・・・何をですか？」

元気なのは最初だけだね

「お楽しみ」

ぶつちやけ祭りの準備だ・・・日本ね（笑）

屋台は無理だけど・・・夜空に花を咲かせましょう

「明日も早いから、今日はもう寝よう。エルザはシャルロット・イザベラを連れて浴衣を着せてくれ。アンリエッタ・エレオノール・ルイズ・ヴェールズの4人もだ。4人の親には俺が言っておく、因みにヴェールズは甚平だ。アロスは俺に付いて来い」

俺は領主になつたんだから、領民の為にいろいろやんなきゃな
名産品を造って売り出さないとな

平民でも造れる物だから量産可能になったら任せるつもりだしな
俺が行うのは魔法でしか出来ない事だけにするつもりだ

「わかった？」

「うん」「はい！」

2人の返事を聞いてから俺は紅茶を一気に飲み干して立ち上がって
寝室に向かった

2人も自分の部屋に入っていくのを感じた

早く信頼できる家臣を集めなきゃな

政治を出来るのが、いつまでも俺を入れて3人つてのは辛いからな
俺はベットに寝そべりながら、シャルルに渡された領の簡単な情報
の書いてある書類を見る

王家直轄だから結構デカいな・・・ラグドリアン湖の向こう側のモ
ンモランシ家にも挨拶するか？

・・・全ては領地の干拓に成功させて、領地の経営も順調になって
からだな

「ふあむ・・・今日はいろいろ疲れたな。特に血が足りない」

ベットをゴロゴロと転がって荷物が置いてある方に転がる

ベットから顔と手だけを出して、荷物をガサガサと漁る

「何処にやったかな？」

確か魔力回復剤とエルザの為の血を舐みたいに凝縮して固めた物が
あつた筈なんだよな

「ピギイ！」

「スラお？何処に行つてたんだ？」

スラおがぴよんぴよんと跳ねながらベットに潜り込んできた

スラおは産まれた？ばかりだからなのか、ラグドリアン湖周辺を探
検してみたみたいだ・・・土で汚れてる

「ちよつと待て！・・・ほら」

魔法でスラおを綺麗にしてベットに置いて、また2つを捜す

「おっ！あつた」

凝血を噛み砕き、魔法薬を飲み干した

「おゝ クラクラするゝ」

よろよろとベットに倒れて意識を失った

第15滴（前書き）

半月ほど放置してたら、お気に入り数が凄いことに・・・10000を超えた！

皆さんありがとうございます

第15滴

昨日と同じく、午前・午後はパーティーの準備をした

俺はアロスと一緒に皆と別れて花火の準備をした

ハルゲギニアには花火が無かったから、成功すればそれなりの値段になるだろう

浴衣と合わせてさらに売れると思う・・・ってか、売る！

じゃないと領地が駄目になると思う

それから母さんの事は、あくまで後盾としての結婚らしい

母さんの肩書きはガリア王の愛人だからね

父さんが死んだら肩書きが無くなって、後盾も無いから危なくなるって理由らしい

因みに俺は一応王位継承権第一位だから安心らしい

俺が王位継承権第一位だから母さんに取り入ろうとする者がいるかもしれないってものあるらしい・・・全部シャルルから聞いた事だ今はジョセフと母さんに会いたくなかったからね

「時間が無いので、急ごうね！」

「はい！」

アロスが元気良く返事をしてくれてるけど・・・全然終わる気配がしねえ！

2人で花火の準備なんて無理がありました！！

花火打ち上げ時間までにはギリギリで間に合うと思うけど、それまでパーティーに出る事は無理だな・・・やり過ぎちゃったZE

「アーサー様・・・終わるんですか？」

ちよつと不安そうに俺を見てくるアロス

「・・・さあ？大丈夫じゃね？」

「曖昧ですね！！本当に大丈夫なんですか！？」

俺だって不安ですよ！

「喋ってる暇があるなら手を動かしたまえ！」

ちよつと偉そうに言ってみた

アロスが眼で何かを訴えてるけど気にしない

「や・・・やつと終わった」

「打ち上げまでには・・・なんとか間に合いましたね」

準備が終わった俺達は汚れたまま地面にへたれこんだ

結局俺とアロスで午前と午前をフルに使っても間に合わなかったの
で、パーティーの時間も準備をってしまった

「じゃあ、俺は会場に行くよ。あとは宜しく頼むよ」

よろよろと立ち上がってアロスに花火打ち上げを頼んで会場に向かう

「わかりました。出来れば食べる物が欲しいです」

アロスの言つとおり俺達何も食べてないや

「わかった。何か持って来させるよ」

エルザにでも持って行かせるか
それにしても疲れた

明日はズット情眠しよう

ダラダラと歩いて会場に到着

会場では皆楽しそうに飲んで喰ってを満喫してる

「やあ、アーサー。遅かったね」

「シャルル兄上。朝からズット準備をしてて、やっと終わったところですよ」

「準備とは大砲を使うヤツか？持ってきた大砲が見当たらんが・

」

・・・この2人って毎回一緒にいない？
実はかなりの仲良しこよしなんじゃね？

「それもありますけど・・・エルザ、準備は？」

ちようど近くを通り過ぎようとしていたエルザを呼び止める

「コッチの準備は万全です。シャルロット様、イザベラ様、アンリ
エツタ様、ウエールズ様、ルイズ様、エレオノール様の6名をお呼
びして頂ければ何時でも出来ます」

エルザは本当に優秀だな

「んじゃあ、早速始めようか？・・・ジョセフ兄上、シャルル兄上
30分後に、皆さんをラグドリアン湖に集めてもらって宜しいです

か？」

「うむ、わかった」

「頑張つてね。期待してるよ」

2人と別れて、エルザと一緒に6人を集めて浴衣と甚平に着替えた
・・・浴衣と甚平に着替えたのだが・・・

「何故俺も浴衣なんだ？」

俺の横で自分も着替えたエルザに問い掛ける

「お似合いだからです！」

俺の浴衣は紺色で帯がオレンジと黄色・・・モロセイバーです
多分検索すれば出るんじゃないかな？

リンゴ飴くわえて焼きトウモロコシを持つてる姿で・・・何を言っ
てるんだ俺は？

「確かに似合ってるわね・・・腹立たしいくらい」

ギリギリと歯軋りをしながら俺を睨むルイズ・・・なんで敵意を剥
き出しなんだ？

「んじゃ、皆の姿を御披露目するから付いて来て」

お互いにお互いの浴衣を見て勝った負けたをしているので、先に歩
いて案内する

ウェールズが浴衣姿のイザベラを見て鼻から愛が溢れてる

記憶は無いんだけど・・・ウェールズってこんな奴だったっけ？
もっと凛々しくて『プリンス・オブ・ウェールズ』とか痛いあだ名
が無かったっけ？
あだ名間違えてる気がするけど・・・

原作の知識を消した事を少し後悔している今日この頃です

「遅くなりました」

シャルロット達を連れてジョセフ達が待つラグドリアン湖に到着
はぐれないようにルイズとシャルロットの手を繋いでる
一番小さい子達だからね

「おお、遅かつ・・・た・・・な」

ジョセフが俺達の方を向いて固まった
なんで？

「兄さんどうしたんだい？・・・えっとアーサーでいいのかな？」

シャルルが俺を見て頭痛がするのか、こめかみ押さえた

「そうだよ。なんだよ？人の顔を見てそんな態度・・・苛つくぞ！
エルザも声を押し殺して笑ってるな！」

「クツ・・・く、口調が変わってますよ・・・ププッ」

他の王族や貴族は、俺の品の無い口調を聞いて戸惑ってる

「確かにアーサーは女顔だったけど・・・」

「ああ、アレでは完璧に女性だな」

ジョセフとシャルルがこそこそと話してる

「チッ！」

「もう素が出すぎですよ」

舌打ちをしたらエルザに怒られた

「あーもー！・・・今回我が領地で販売する予定の服の試作品です
！！」

頭をガシガシとかいてから、なげやり気味に全員を前に出しながら
説明する

「へへ、布一枚でこんなにも綺麗に出来るんだ」

「ほお、ゴテゴテしてなくて良いな」

シャルルとジョセフが自分達の子供をジロジロ見ながら感想を言う
他の親達も自分の子を見て何かしらを呟いてる

見られてる子供達は恥ずかしそうにモジモジしてる・・・一番モジ
モジしてるのはエレオノールだね

「この中で一番可愛いぞ！」

ジヨセフがイザベラを抱き上げて問題発言をした！！
他国の王族もいるのにデレた！！

「何を言ってるのさ、兄さん。一番はシャルロットだよ！」

シャルルも駄目になってる！！

2人とも親バカだ！orz

「それは聞き捨てなりませんな。ウチのアンリエッタも負けてませんぞ？」

ここでトリステイン王も参戦だと！？

カオス過ぎるでしょ！！

ヴァリエール公爵が何か言いたそうにしてるけど・・・言えないよね（笑）

王族を差し置いて自分の子が！なんて

「はいはい！次もウチの特産品にしようと思ってる物です・・・ライト」

手を叩いて注目させてから、右手にライトの呪文を発動させる

「素と敬語がゴチャゴチャになってますよ」

エルザからの注意

・・・気を付けないと

「ゴホン・・・せいっ！」

一度咳払いしてから、ライトを空中に投げた

・・・浴衣だと足が上がらない

「あちらをご覧ください!!」

俺がラグドリアン湖を指差した瞬間

ひゅ~~~~・・・・ドーン

夜空に火の花が咲いた

「お~~~~」

「コレは凄い!」

「なんと綺麗な」

皆感動したように、連続で打ち上がる花火を見ている
何とか成功だな

「ふう」

「お疲れ様です」

近くの木の下に座ったら、エルザが水を渡してきた

「ありがとう・・・アロスに食べ物を持ってっつてくれないかな?」

水を一口飲んでからエルザに頼んだ

エルザは一礼してから、料理が置いてある場所に向かった

エルザってプライベートと仕事をちゃんと分けてるな

純粹に凄いと思うよ

「とにかく成功して良かった」

水を一気に飲み干す

「……………」

「……………」

「……………」

気まずいのですが……

「……何？」

アンリエッタとウェールズがジッと俺を見てるので、耐えられなくなつて聞いた

因みにアンリエッタ、ウェールズ、俺の順だ

「アルトリア様は凄いですね」

にっこり笑いながら、しかしどこか寂しそう笑顔で言ってくるアンリエッタ

「そうでもないよ。俺は自分がしたいようにしてるだけさ」

「それなら尚更凄いよ」

ウェールズも悲しそうな表情で言ってくる

今度はウエールズか・・・何コイツ等？

悲劇の主人公とヒロインでも演じてるのか？

まだ子供とはいえ・・・正直ウザイ

「何が言いたいんだよ？自分達も何かしたいのか？」

「あ・・・いえ・・・」

「っ！・・・その・・・」

真っ直ぐ2人を見て言ったら、2人とも気まずそうに目を逸らした
本当にウザいな・・・疲れてるからそう思うのか？

「どうせ、王族として持ち上げられてるのが嫌ってんだろ？・・・
ったく、我が儘だな。だったら、自分の力で何かしてみろよ。他人
の力を借りても良いから自分という存在を世間に認めさせる」

それだけ言っと立ち上がって料理が置いてあるテーブルに向かおう
とする

いい加減腹が減ったからな

「待って下さい！具体的には何をしたら良いでしょうか！？」

そんなのまで俺に聞くのかよ#

そんなぐらい自分で考えろし！

「今他人の力を借りても良いからって言ったよね！？」

無言で行こうとしたらウエールズが・・・

アホリエッタてウゼールズ

「・・・歌でも歌えよ。それが一番自分を表現しやすいと思うから」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

2人とも黙り込んで考え始めたので、料理を食いに行った

それからパーティーは無事終了して、俺はオルレアンの領主になった

それから数日後、アンリエッタが歌姫アンリ、ウエールズが俳優ウルクとしてデビューした

・・・あいつら本気にしてたんだ

んで、親バカのジョセフとシャルルも自分達の娘をイザベラを歌姫イルザ、シャルロットを歌姫タバサとしてデビューさせた・・・もう引きこもって良いですか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2997v/>

ゼロの使い魔～竜の血族～

2011年9月14日08時13分発行